

大本營海軍報道部課長

海軍大佐 平出英夫

397.3  
H64  
2

# 作戰一萬湮

米英艦隊擊滅續篇



興亞日本社版

80



\*0057741000\*

0057741-000

397.3-H64-2ウ

作戰一万湮

平出英夫・著

興亞日本社

昭和17

AJG

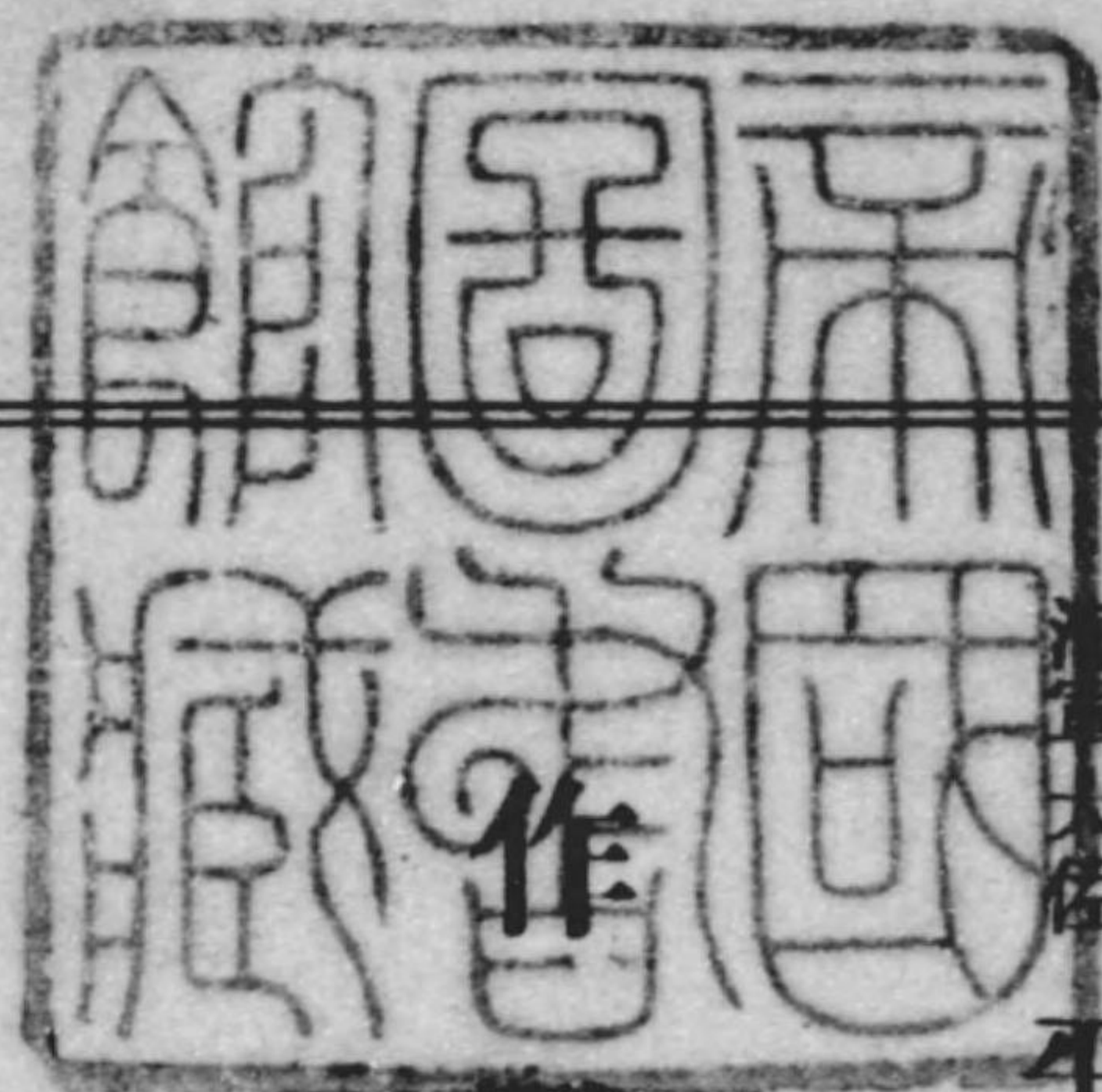


421

397.3

H64

2



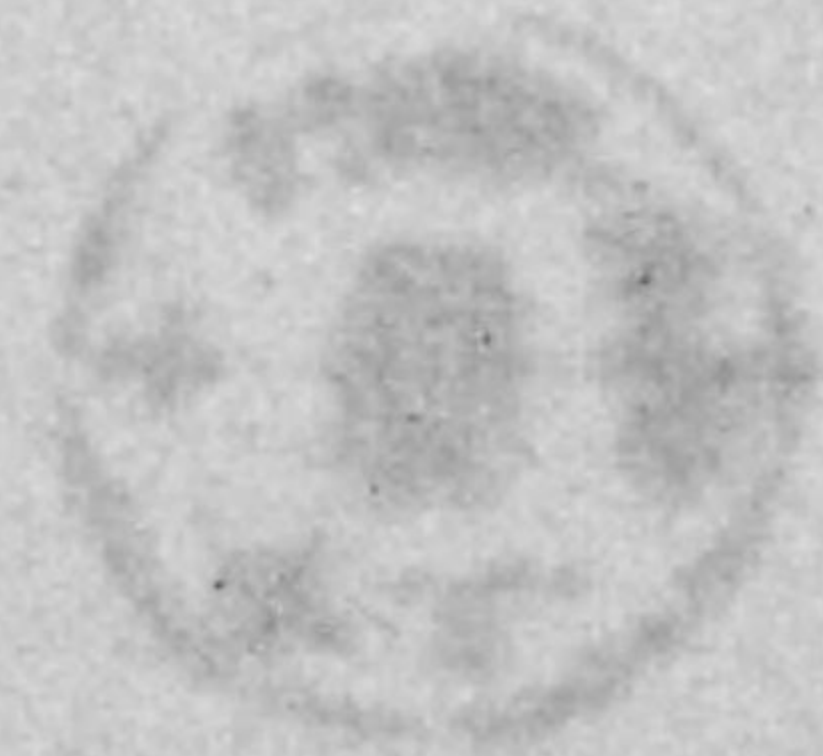
平出英夫

戰一萬湮

興亞日本社版







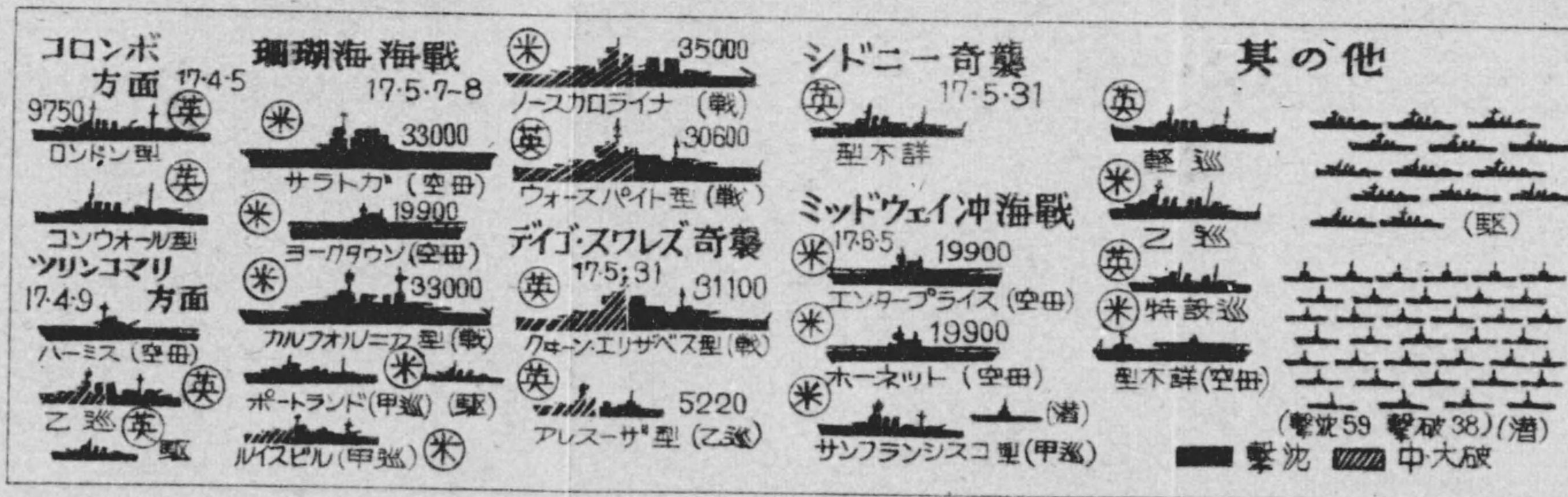
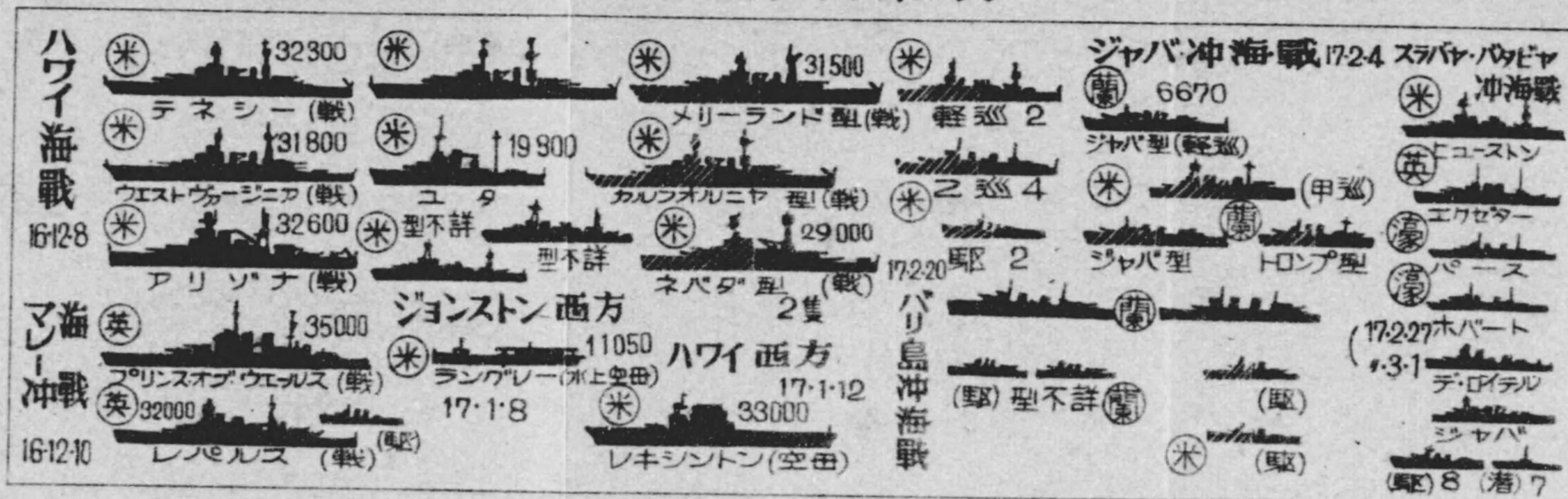


大東亞戰局地圖





## 海戦別戦果表





954  
37

目次

一、序論 作戦一萬渾……………(三)

    大海洋作戦の展開……………(三)

    珊瑚海海戦の真相……………(六)

    還らぬ殊勳機……………(一〇)

    戦果の意義……………(二六)

二、南阿・南濠への雄渾作戦……………(三五)

    シドニー軍港特殊潜航艇の強襲……………(三五)

    米海軍葬送艦隊と化す……………(三〇)





米英デマ放送の馬脚……………(五)

三、東太平洋への新作戦……………(四三)

ミッドウエーの刺違へ戦法……………(四三)

アリューシャン群島の猛攻……………(四五)

同時作戦の成功……………(五)

四、敵の反撃企圖粉碎……………(四三)

ソロモン海戦の大戦果……………(六三)

濠洲全く孤立化……………(六八)

米・濠の苦悶愈々深刻……………(七〇)

五、大東亞戦線報告……………(五)

マレー沖海戦の悲愴……………(七)

生れ變つた昭南軍港……………(八)

日本になつく原住民……………(六)

美しき森と花のジャバ都市……………(九)

舞踊の島バリ……………(九)

クーバンの落下傘勇士……………(一〇)

日本的なメナド……………(一〇)

凄絶、コレヒドールの變貌……………(一一)

愉しき俘虜生活……………(一一)

六、占領地域の資源と建設戦……………(一三)



石油の復興状況……………(二三)

食糧の現地自給……………(二三)

キニーネ・錫・資源の處理……………(三六)

七、海軍精神の發揮と今後の作戦……………(四〇)

    求敵必殺の海軍精神……………(四〇)

    海軍精神の探究……………(五〇)

    戦捷に導く日本女性の偉大性……………(七一)

    海戦別敵艦撃破戦果……………(八一)

    敵のゲリラ戦……………(八七)

    勝利は國民の總力……………(九七)

作 戦 一 萬 浬



一、作戰一萬哩

大海洋作戰の展開

いま我が海軍部隊は、北はアリユーション群島を奇襲攻略し、南は濠洲  
メルボーン要港奥深く強襲敵を戦慄せしめ、さらに戈を轉じて東はミッドウエ  
方面の敵航空母艦群を誘導撃滅し、米本土沿岸に砲火の洗禮を浴びせ、西は  
印度洋はるか彼方の南アマダカスカル島の敵最大根據地デエゴ・スワレズ港に  
決死突入して、赫々の大戦果をあげるなど、實に東西一萬マイル、南北五千マ  
イル、人類が想定し得る最大の海域を完全に制壓して、世界戦史に比類なき大

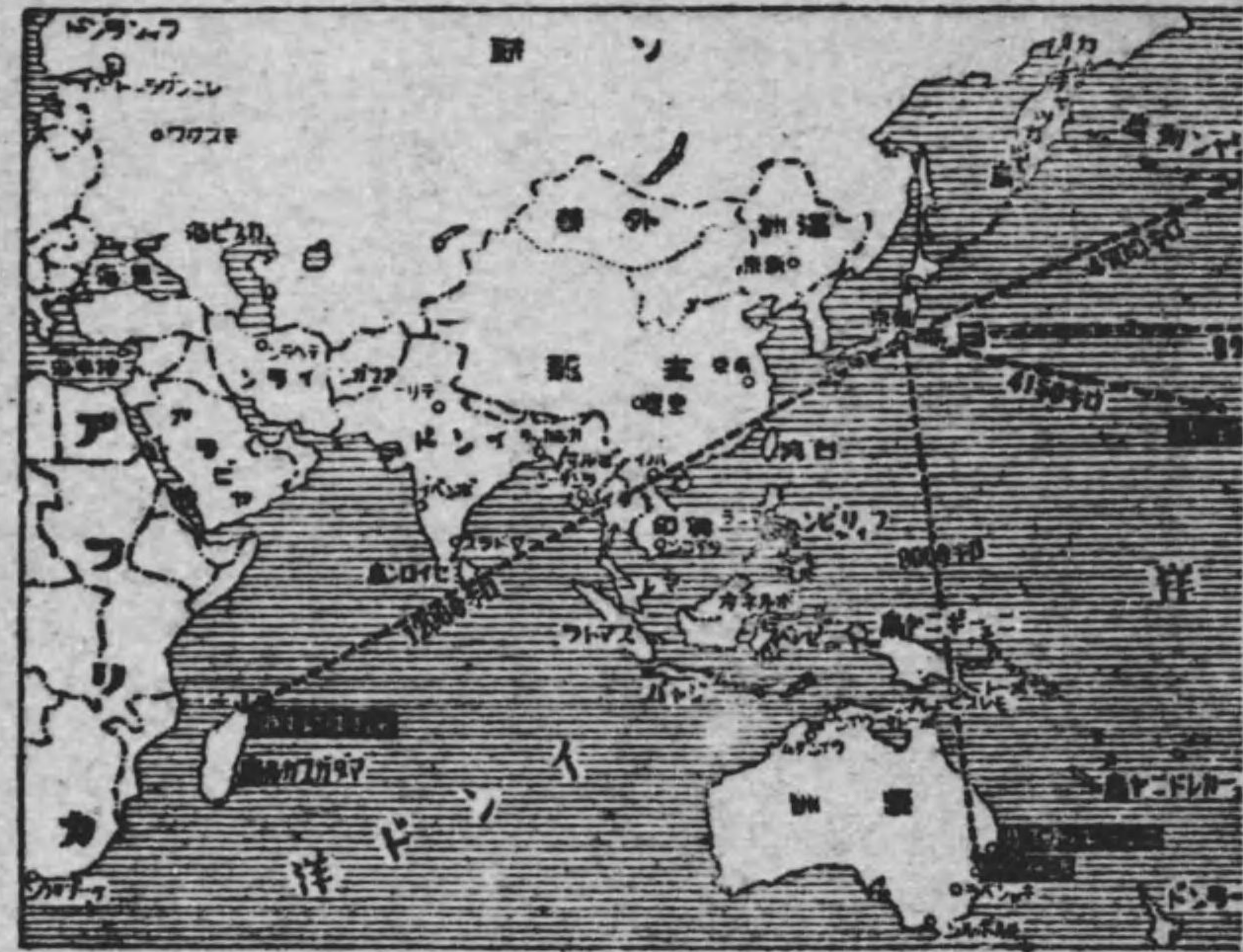


海洋作戦を展開しつゝあるのである。

皇國の興廢を塔して、三十七年前日本海海戦開始に先立つて掲げられた乙信號旗は、再びハワイ奇襲直前の太平洋上に翻翻とひるがへつたのであつた。

かくて、將兵を感激せしめ、奮戦撃滅の大勇猛心をふるひおこさせた今回の乙信號旗は、じつに「米英艦隊撃滅開始！」の大號令でもあつた。

劈頭のハワイ海戦以來、我が海軍の戦果は、世界を震撼せしめつゝある。ハワイ海戦より印度洋作戦に至るまでの戦果の詳報と意義については、私は、「米英艦隊撃滅」とその（増補版）の書の中で述べてゐる。しかしながら、戦ひは、それより更に展開してゐる。むしろこれからである。



大御稜威の下、天佑神助を確信し、われわれ國民として、最後まで絶対に戦ひつゞけ、勝ち抜くといふ大勇猛心を、ますます鞏固にいたさねばならぬと思ふのである。

幸ひに、私は、珊瑚海海戦の最中に我が占領地域の、〇萬哩の行程を飛んで、現地を視察して來たのであるから、その報告をいたしたいが、先づ順序として、世界海戦史に於いて、初めて現はれた所謂近代海戦の模型とも云ふべき珊瑚海海戦より述べたいと思ふ。



## 一、珊瑚海海戦の真相

珊瑚海海戦は、五月七日、八日の兩日にわたつて行はれたものである。

こゝで考へるべきことはアメリカが、濠洲及びニュージールランドを據點として南から日本を反撃せんと企てゝゐることは依然として續いてをり、その傾向は益々強くならうとしてゐる。濠洲に對する武器の補給、殊に飛行機の補給には、きはめて力を入れてゐる。すなはち、濠洲及びアメリカが共同して、濠洲を以つて日本に對して守り終せようといふ熱意は極めて旺盛であることを注意しなければならぬ。現在濠洲の南部方面に、ハワイ經由、或ひはアメリカから直接に兵器が送られ、これらが、だん／＼北部方面へ移動されて、或ひはダーウ

イン、タウンズビル、その他この邊りに無數にある飛行場におくられて我に挑戦して來るのである。その爲に、我が方としては、屢々ポートダーウィンその他に熾烈な爆撃を敢行してゐる。この爆撃といふものは、陸軍にすれば、砲撃に匹敵するもので、それだけでは占領出來ない、砲撃が濟んだら、その次には白兵を以て占領しなければならぬものであつて、爆撃においても砲撃と同じことが言へるのである。ずるぶん爆撃してはゐるが、いくら爆撃しても、性懲りもなく次から次へと飛行機を持つて來て小癩にも挑戦してくる。

モレスビーの如きも何回となく爆撃してゐる。この邊一帶は富士山よりも高い山があるので、已むを得ず飛行機で爆撃を敢行してゐるのである。ニューブリテン島のラバウルも、チモール島のクーパーンも戦線に行つてみると眞に第一線の感じが深い。こゝに比較すれば、その他の所は第一線といふ感じは出ない位である。したがつて、こゝにゐる將兵は、大東亞海の第一線を護つてゐるの



である。如何なることがあつても守らなければならぬといふ堅い決意を持つてゐる。チモール島のクーパンの飛行場あたりに行つてわれ／＼が感ずるのは、非常に壯烈な感で、ジャバ、スマトラ、ボルネオの第一線として、自分たちが決死の守備でこゝで喰止めてゐるのだといふ感じが、ひし／＼と身に迫つて感ぜられるのである。

濠洲を足場として日本への反撃の、もう一つの方法として、アメリカでは、更に別の手を考へてゐる。それは何かといへば、航空母艦と、それを護衛する艦、いはゆる空母集團、或ひは機動部隊の戦法である。

さて、今度の珊瑚海々戦であるが、米英艦隊が航空母艦を相伴つてこゝに現はれた時には、我が海軍としては、絶対に通すまじと張切つてゐたわけである。

七日、八日の兩日に互つて行はれた海戦は、全く性質の異つた二つの海戦である。

七日の海戦は、マレー沖海戦と殆んど同じやうな性質のもので、米英の戦艦を主體とする敵の有力な部隊が、その優勢を恃み、わが小型航空母艦に釣られて珊瑚海の北部に近接して來たのであるが、根據地から飛び出した我が攻撃隊が、魚雷、爆彈を抱いて行つて敵戦艦を捕捉、撃滅したのである。これは、彼等の指揮官がいかに幼稚な兵術思想しか持合せないかといふことを示すものである。

八日の戦ひは航空母艦同志がやつたのであつて、これは全く世界戦史に初めての、所謂近代戦の一つの模型となるべき戦であつた。日露戦争の時の戦闘距離數千米に比して、數百哩と云ふ會て豫想しなかつたほどの長大距離の海上で戦はれたのである。



還らぬ殊勳機

この日未明、敵艦の所在が大體分つたのである。これには次のやうな悲壯な挿話が生まれた。その朝捜索隊が扇のやうな形に飛出して行つた。そして、敵艦の所在は、或る飛行兵曹長の指揮する偵察機が発見したのであるが、それから九時過ぎ位までずつと接觸を保つて、その間刻々と敵の艦隊の状況を知らせて来たのである。この機は、また、要領が非常に良くて、我が攻撃機の部隊が出動する前に、敵側がどういふ状況であるかといふことを殆んど手に取るやうに知らせたのである。この兵曹長の報告は激賞を受けてゐるのである。かうして苦心しながら偵察をつゞけてゐる中に、辛うじて基地へ戻れるかどうかといふ

程もう殆んど油がなくなつて来た。偵察機といふのは他の飛行機と違つて、華々しく空中で戦闘をするのが目的ではなくて、敵を見つけて隠密のうちに状況を知らせて、それと接觸を保つて、味方の戦闘部隊をそこに誘導して来る。それが偵察機の仕事である。自分が敵と戦ふといふことは仕事の中に入つてゐないのである。幸なことに、その時には白い断雲がうまい具合に上空にあつた。これが必要ならば非常にむづかしいことであつた。その断雲のお蔭で、そつと雲から雲に入り、敵が逃げたと思ふと、少し飛出して敵の状況をさぐり、異状があれば、すぐに味方に無電を打つ。かうして何時間も接觸を保つてをつた。この接觸を保つ飛行機があるといふことは、向ふとしては非常に厭なことで、必ずこの接觸機を撃ち落とすといふことに努力するのである。そこで敵の戦闘機群は何回となくこの偵察機を落さうとしてやつて来る。しかし、こゝで華々しく戦闘をしてはならない、戦闘をさせて、あくまで向ふの状況を味方に知らせなけ



ればならぬ。これは戦闘精神力の旺盛な日本人の氣持としては、中々出来ないことで、相手が強からうが弱からうが、挑戦し、また敵機群はどうしてもやつけたいが、それが絶對にしてはならないのであるから、日本人としては可なり齒がゆい苦しい仕事である。彼は、それを何時間も續けて、今言ふやうな立派な報告をどん／＼打つてよこす。最後に自分の油がなくなつたので、彼も母艦まで歸へつて、補給しようとしたのであるが、それは、まづすぐに母艦まで辛うじて歸るだけの油しかない。少しでも遅れれば油はなくなり。母艦に辿りつくことが出来ないのだ。そこまで計算して、母艦の方へ向つて飛んで行くと、遙か彼方から、雲のごとき航空部隊が自分の方を目がけて疾風のごとく飛んで來るのが目に映じた。敵か味方かと、よく見れば、それは、彼の無電によつて急遽出動して來た我が攻撃部隊だつたのである。彼の前には二つの道がある一つはそのまゝ母艦に歸つて出直すといふ生きる道、他の一つはこの編隊を

誘導する死の道である。彼は考へた。今まで敵の上空ををつて、一番詳しく敵の状況を知つてゐるのは自分以外にはない筈である。もちろんその機が歸る場合には一應代りのものと呼んで歸るのであるが、他の飛行機はそれほど詳しく知らない。そこで、若し今自分が歸つてしまつて攻撃部隊が、所在がよく分らず、敵にぶつつからなかつたとしたらどうなるであらうか？ まことにそれでは、遺憾千萬である。いまこそ自分が完全にお役目を果すべき千載一遇の好機ではなからうか。かう考へると彼は、もはや自分の機がガソリンがなくなりかけてゐることは、念頭になかつた。そこで、同じ味方を誘導するにしても、そして、敵の母艦を急襲するためには、待ちかまへてゐる敵の戦闘機群の目に觸れぬやうにして、自分が誘導するのが一番よいといふことを自分で知つてゐるので、さういふことを考へたあげく、彼はやらうと意を決したのである。それは即ち自分は進んで死ぬといふ決心を意味するものである。今自分が舵を逆に



取つて、飛行機を敵の方向へ向ければ死ぬに決つてゐる。然るに彼は敢然と舵を逆に取り取つて敵の方に向ひ、さうして味方の攻撃部隊を誘導したのである。これは、日本人でなければ出来ないことである。敵の方では、日本の飛行機が來るといふことは薄々知つてゐるから、日本の飛行機のやつて來ると思ふ方面に戦闘機群を出して、これを途中で撃落さうといふ構へを取つてゐた。その戦闘機群の中に味方の攻撃隊が入れば、相當数の我が攻撃機が損害を蒙ることであらう。戦闘機といふのは攻撃機を撃落すやうに武装や構造が出來てゐるのであるから、これに出遭ふよう、兵曹長の苦心によつて、可なり迂回して、我が攻撃隊は敵の戦闘機に會ふことなく、うまく敵の航空母艦の上空に達することが出來た。この我が攻撃機が、魚雷又は大型爆弾を抱いて果敢な急降下を始める頃、やうやく敵の戦闘機が、一大事とばかり戻つて來たときには、彼等を收容する米母艦は我が魚雷攻撃の物凄さに最後の形相を呈してゐたのであつた。

しかし、悲壯なことは、間もなくこの偵察機は自分の油が全く盡きて、珊瑚海上に於いて還らざる飛行機の中に入つたのである。

まことに、この場合の偵察機の行動といふものは、實に沈勇そのものであつて、真珠灣の特別攻撃隊の九勇士に比較せらるべきものではないかと思ふ。珊瑚海海戦をあれほど華々しい戦果に導いた大きな原因の一つがこの沈勇にして還らざる偵察者によつて行はれたといふことが言へるのである。同じ敵に接觸するにしても、その誘導がうまく行かなければ味方の損害は非常に大きくなる。それが大きくなれば、あれだけの戦果を擧げないうちにこつちが負けてしまふといふこともあり得るのであつて、この偵察者であつた飛行兵曹長の偉勳は、まことに大なるものであると思ふ。



### 戦果の意義

さて、この海戦を大観するとき、敵艦隊が作戦指揮の極めて拙劣なことがはつきりするのである。

しかし、米英の指導者は自國の海軍士官達が凡庸であり、また固陋なることに気がついてゐないやうである。恐らくこれに氣づくときには、既に米英は第三流海軍國に下落してゐることを發見するであらう。兵術思想の幼稚であつたこと、これがこの日の海戦において曝露された重大な米英の弱點である。

この海戦においてわが方は、残念ながら小型航空母艦一隻、——これは開戦に際し給油船を改装したものであるが、これを失つた。しかし敵カリフォルニ

ヤ型戦艦を撃沈し、英戦艦ウオースバイトを大破せしめたのである。

翌八日の海戦はこれこそ近代海洋戦においてはじめて起つた精銳なる航空母艦同士の、食ふか食はれるかの一種の激戦であつたので、眞に手に汗を握る數時間であつたらうと想像されるのである。

彼我數百機の艦載飛行機が、互ひに敵航空母艦群に殺倒し、突撃死闘を繰り返し、遂にわが寡兵をもつて、アメリカ最銳の航空母艦二隻を撃沈し、その艦上機を全滅したのである。航空母艦沈没により、自滅した飛行機を別とするも、空中戦だけでわが方の四倍を超へる敵機を撃墜したことをもつてしても、わが實力が遙かに敵に優越してゐることを物語り、また敵の航空母艦を援護せる大型艦にまで殺倒して、これをも大破せしめたといふことから見ても、わが攻撃力が綽々たる餘裕を残してゐたことを示してゐるのである。

この息づまるやうな激しい戦ひにおいて、わが荒鷲の或るものは、既に發表さ



れた通り、魚雷を抱いたまゝ敵大型巡洋艦に體當りを敢行し、これに火災を起し大破せしめてゐるが、これは海軍傳統の必殺精神を遺憾なく發揮したものである。内地にゐる者は、かゝる戦果が上る毎に、たゞ喜んでゐるだけではない。ましてかゝる大戦勝が海戦においては當り前のことのやうに狎れてはならぬと思ふ。嚴肅に、敬虔に、かゝる戦果も勇士達の忠魂が實を結んだのであるといふところに思ひをいたし、自分だけよければいゝといふ米英的根性を打破しなければならぬと痛感するのである。

この海戦において殘存敵艦隊の美事なる逃足だけは、洵に感心させられるほど早かつたのである。これこそ必死の逃足と稱すべきで、爾後數日に亘つて珊瑚海の索敵の效もなく、遂に敵を發見捕捉し得なかつたのは残念であるが、最近の情報によると、珊瑚海敗戦の生存者が逃げ伸びて、シドニーに辿り着いたといふことである。當局は彼等に嚴重な銃口令を布き、また濠洲電報が彼等を

隔離してゐると報じてゐるところを見ても、ルーズベルトやチャーチルが如何にこの大敗戦の事實を重大視してゐるかが察せられる。しかし軍事上の必要に藉口して、これを隠蔽しても、隠せば隠すほどその反響は大きくなるのは必定であつて、まして例によつて支那流の勝つた勝つたの宣傳の如きは、彼等自身で自分の首を締めるものだといふことが出来る。笑止千萬といふ字は、恐らくこのやうな場合に使ふべきだと思ふ。

この海戦後、逸早く逃出したのは彼であり、爾後珊瑚海の戦場は、全くわが艦隊の遊弋海面となつたのであつて、この事實によつて日本が如何なることを握つたかは、米英の専門家には分る筈である。

海戦においては海に浮いて戦ひ得るものが勝ち、海底に沈んで戦ひ得ないものが負けであるといふことは、あまりにはつきりした鐵則である。

こゝで興味のあるのは、珊瑚海海戦における米英艦隊の作戦行動を、日本側



と比較研究すると、實に面白い差違のあることである。

それは海戦にまでその國民性が現はれてゐるといふことであつて、イギリス艦隊はイギリス國民の老獯を遺憾なく發揮し、アメリカ艦隊をお先棒に利用して、自分はなるべく危険を避ける行動をとつてゐる。

例へばアメリカのカリフォルニア型が撃沈されてイギリスのウオスバイトが大損傷のまゝ逃げ失せてゐるのも、また濠洲側の飛行機が殆んど協力してゐないのも、その明白な證據である。

一方アメリカはイギリスに比べてお人好しとでも言はうか、イギリスにおだてられて、わが鋭鋒の正面に出て来て、一生懸命になつて力闘してひどい目に遭つたのがはつきり分るのである。殊に航空母艦機の搭乗員は相當勇敢に戦つたやうであるが、航空部隊の指揮官の愚鈍はどうすることも出来ず、みす／＼やりそこなつて、大敗を喫してゐるのが明瞭に現はれてゐる。

こゝに氣の毒なのは濠洲である。樂園と言はれた濠洲は、頼むことの出来な  
い米英の力を頼りにして、わが國に敵對してゐるために、正に修羅地獄たらん  
としてゐるのである。これは明達活眼の指導者を選ばなかつた酬ひであつて、  
反省を知らざる者の當然落ち行く運命であらう。大命の降る限り、濠洲が敵で  
ある以上、わが必殺の大劍は彼等の頭上に降るであらう。七百萬の濠洲人は、  
この現實の前に果して如何なる感を抱くであらうか。

こゝで一言述べたいのは、珊瑚海海戦によつて、敵の戦力は徹底的に低下  
し、航空母艦にしても残存数は概ね四隻に過ぎない。これが、ミッドウエー奇  
襲に於いて、更に撃沈されたのであるが、敵國においては商船を改装せる航空  
母艦を續々竣工中であり、また本格的な航空母艦の建造にも狂氣のやうに急速  
に着手してゐる有様であるから、わが海軍としても、國家としても、現在の海  
上勢力の優位をますます擴張することに努力し、敵撃滅の手を緩めてはならな



いのである。

かくのごとく、戦果の意義は、日本全體にとつて重大な意義を持つものであるといふことが言へるのである。殊にサラトガ級、ヨークタウンの撃滅は、これによつて東京の空襲にも携つた航空母艦であると思はれるので、完全に仇を取つたわけで、日本人の氣持からも、精神的に云つても非常に大きな戦果であると言へるのである。

又これを軍事的に見れば、百二十機の飛行機を積めるサラトガ、または約八九十機の飛行機を積めるヨークタウン、これらを海底に叩きこんだといふことは、その他の残存してゐる航空母艦を沈めたよりもつと有利であるといふことが言へるのである。殊にこの日航空母艦の周りについてをった軍艦の中の一隻はノースカロライナであつた。あれがあゝの時の戦闘で傷ついたわけである。ノース・カロライナは、大軍擴計畫の先登をきつて、昨春竣工した新鋭戦艦で、

三萬五千トン、九門の四十センチ砲と、舷側、砲塔を覆ふ重装甲は、英のキング・ジョージ五世級と共に「近代的不沈戦艦」と云はれてゐる。

どうしてかゝる素晴らしき獲物を逃がしたのか、なぜ撃沈してしまはなかつたのかといふ疑問が起ると思ふが、昔のやうに近距離で戦争をしてをればさういふことは決してないのであつて、必ず食ふか食はれるかといふことになる。ところが近代海戦の模型とも云ふべき珊瑚海海戦では彼我の距離が數百哩餘りにも遠くて、攻撃續行中の飛行機の收容といふ問題が起るのである。アメリカの方は航空母艦が沈んでしまつたのであるから、ただ自分の體だけをせい一杯はしらせる、當日も非常な速力で逃げうせてしまつたのであるが、日本の方は航空母艦がある。そこで、飛行機の收容をするのであるが、これが可なりの時間がかかるものである。しかも還つて來る飛行機は無事な飛行機ばかりではない。還らざるもの三十一機と發表され、あとで七機還つて來たのであるが、還つて



来る飛行機でも多少にせよ損傷してゐるものがある。さういふ傷ついてゐる飛行機をいたはりながら、すべてうまく收容する作業は決して簡単ではない。

飛行隊の編成をやり直し、丈夫なものだけを集めて、再攻撃の作戦をねる、かういふふうにして次の攻撃をやる、さういふ編成が出来るとは敵は逃げるに最も都合のよい全速力を發揮して逃げてゐる。なんとかして逃げ終せたいといふのが真情である。かういふわけで、海にゐない者から見て齒がゆいやうな気がする場合でも、さて、実際に作戦に當つてゐる者は懸命な努力をしてゐるのであり、われ／＼の考へるよりもつとひどい焦燥を感じて努力してゐるのである。全部を沈めた場合より残して逃げられた時の方が苦勞が多いといふことは、容易に想像の出来ることである。大體かういふ様子で珊瑚海海戦はあの戦果をあげたのである。

## 二、南阿・南濠への雄渾作戦

### シドニー軍港特殊潜航艇の強襲

珊瑚海海戦をもつて、西太平洋一帯の敵海軍蠢動を撃攘し、一段落を劃した我が海軍は、俄然雄渾無比の大作戦を展開したのであつた。

すなはち、わが特殊潜航艇は、五月三十一日未明、マダガスカル島最大の敵根據地なるデエゴ・スワレス港に對し、決死の強襲を敢行、イギリス戦艦クニン・エリザベス型一隻、アレクサ型輕巡洋艦一隻を撃破し、イギリス海軍を顔色なからしめた。



更にこれと日と同じうして、濠洲第一の要港であるシドニー港の奥深く突入し、米艦と覺しき大型軍艦一隻を撃沈し、全濠洲を戦慄のどん底につき落とし、たのであつた。

昨年十二月八日、特殊潜航艇はハワイ真珠灣の奥深く突入して、不滅の偉勳を立てたことは、私どもの感激尙ほ新たなるところであるが、半歳の後なる今日、またもや特殊潜航艇はマダガスカル或はシドニーに再びその雄姿を現はしたのである。

マダガスカル島のデエゴ・スワレズは日本内地より遠くインド洋を隔て、約一萬千キロに位し、濠洲のシドニーは赤道を越えて遙か南約九千三百三十キロを隔てゐるのであつて、わが海洋作戦がいかに雄渾無双なる規模において展開せられつゝあるかが想像せられるのである。

開戦劈頭のハワイ海戦の惨敗より、近くは珊瑚海海戦の惨めな敗北にも拘ら



ず、アメリカ政府當局は敗戦の事實をひた隠しに隠し、

「濠洲防衛に對しては絶対不敗の態勢を整備するに至つた」と豪語し、またアメリカの尻馬に乗る濠洲海相メーキンも、「アメリカの援助により濠洲の防衛は安泰である」と氣休め的な強がりを言つてゐたのである。

ところが、彼等が「絶対不敗の態勢」だといひ、「防衛は安泰である」と稱してゐた濠洲の防衛は、わが海軍部隊の必殺の一撃によつて、もろくもその實體を暴露する





にいたつた。

わが特殊潜航艇の殊勳に名をなさしめたシドニーは、濠洲第一の軍港であつて、首都キャンベラ、メルボルンにつき濠洲有数の経済都市に當り、全人口の九十九パーセントは、英米人を主とする街であつて、わづか五萬餘の原住民は、北の山中に追ひこまれてゐる。市街は高層ビルが櫛比し、地下鐵が走り、高級住宅地の赤屋根が、明澄の空氣のなかで、美しく映えてゐる。英帝國の領土中最も良港と云はれてゐる原因もそこにあるが、元來この港は、ボート・ジャックソンと呼ばれ、天然の良港としては世界で一、二を謳はれる

袋状の港である。港は丁度人參のやうな形をしてゐて小さな入口が澤山にあり、入口はわづか約一マイルの狭い水路で、細長く屈曲してゐるので、少々の風では波などはおこらず、水はかなり深く、卅フィートから四十フィートもあり、良港として誇るだけあつて、英戦艦クイン・エリザベスや四萬トン級の豪華船クイン・メリー一號などが悠々と航行でき、數百の船舶が入港碇泊できるといふ風光明媚な良港である。

濠洲政府としては、シドニーを海軍根據地ならびに船舶建造基地として重視し、その港湾施設は約一マイルの運河によつて直接太平洋に通じてゐる。

港口から約五マイル進むと有名なハーバー・ブリッジ鐵橋が港を一またぎして壯麗な偉觀を示す。この鐵橋下を、二、三萬トン級の大洋航行船が悠々と通航できる。

我が強襲を受けた問題のシドニー軍港は、この橋の手前の小島ガーデン、ア



イランドを中心として港の南岸寄り一帯に建設され、艦艇の修理工場、造船所、水上飛行機、潜水艦の根據地が置かれてあつた。

わが特殊潜航艇は、おそらく、港口に張りめぐらされた嚴重な機雷網をくぐり抜け、哨戒の眼をかすめて、港内深く突入して、敵軍艦を撃沈したものである。

### 米海軍葬送艦隊と化す

かくて、南緯における米英の最後の據點であり、唯一の軍港であり、全濠洲の心臓であるシドニーが、わが猛襲の前に、徹底的に撓亂せらるゝに至つたの

である。この事實を圖のあたりにして、全濠洲人は、濠洲政府が頼みとするアメリカの援助がどのくらい程度のものであり、濠洲防衛の實體がいかなるものであるかを、はつきり認識出来たはずである。

また、このシドニー攻撃によつて、アメリカ海軍は、再びその兵術の拙劣幼稚さを暴露したのである。

なぜか、と云へば、わが海軍をして易々として再び奇襲を許したといふことは、米濠共同防衛上よりする不一致の間隙に乗ぜられたことを意味するからである。

殊にわが水上艦艇が珊瑚海の制海権を擴張して、遠くシドニー沖に現はれてゐることさへ、米濠の飛行機が発見出来なかつたといふことは、その責任が米濠いづれにあるやは論ぜずとしても、濠洲の防衛が崩壊の直前にあることを、珊瑚海海戦に引續き事實をもつて證明してゐるものといへよう。珊瑚海敗戦の



責任者であるアメリカ艦隊指揮官は、またしてもこゝに無能怠慢振りをはつきりと示したことになる、全濠洲人としても、濠洲の防衛を擔當せりと豪語するアメリカ軍のだらしなさを目前に見て、心ある濠洲人は今やアメリカ頼むに足らずとの感を深くしてゐることと思はれる。

濠洲防衛の最高指揮官であるマツカーサーは、日本の特殊潜航艇三隻を撃沈せりと、さも誇らかに宣傳してゐるやうであるが、自國の軍艦は濠洲第一の要港であるシドニーで易々と攻撃撃沈せられてゐるのである。

彼はこの明らかなる事實に目を蔽うて、自慢にもならぬ事柄をてれ隠しに吹聴する前に、當夜シドニー港に突如として起つた凄壯な夜襲によつて、シドニー市民の目の前でアメリカの信用を全く失墜したことが、彼等にとつていかに致命的な大失敗であつたかを自省すべきである。

アメリカ海軍は珊瑚海海戦に頹勢を挽回せんとして脆くも潰え去つた。そこ

で残された唯一の米濠連絡線である東南太平洋ルートを守守すべく、少将シヤフロスを新たに東南太平洋米海軍司令官に任命し、濠洲防衛に躍起となつてゐる状況であるが、この最後の頼みとする米濠連絡線も、今や全く危殆に瀕するに至つたと云つてよい。

アメリカ星條旗の星は日本軍艦旗の旭光の前に一つ／＼消え去りつゝあるのである。今次大東亞戦争の経過からみてもはつきり解るやうに、アメリカ海軍は日本海軍の敵ではなく、その術力においても、勢力においても、こゝ三年や五年では到底われに及びもつかぬものである。すなはち出撃すれば叩かれ、反撃せんとすれば撃滅される「葬送艦隊」に墮し去つたのである。

わが東條首相は、世界に廣く宣言して、濠洲が日本の善隣たらんことをしば／＼忠告してをられるのであるが、濠洲人民は今こそ冷静に、公平にこの事實を判断すべき時である。今や濠洲にして、數次に互る日本の警告を等閑に附し、



與へられた數ヶ月の餘裕を無駄に過し、反省の形跡が認められなければ、大慘禍が濠洲の平和境を見舞ひ、濠洲は全く取返しのかね修羅地獄となるであらう。

日本が敵に廻るものに對しては、恐るべき猛攻を加へることは、既に開戦以來立證された通りであり、味方となるものには暖かい友情、謙讓な態度をもつて當ることは、これまた事實をもつて立派に證明されてゐるのである。御承知の通り佛印においては、賢明なる政治家が英米を頼らず、日本と提携して戦ひを避けたために、現在のやうに安全にして豊かな文化生活を享受してゐるのである。

これに反し蘭印はどうであつたか。當てにもならぬ英米を命の綱と頼み、日本の實力を誤算し、日本との提携忠告を受け入れなかつたために、日本が一度攻撃を決定した後は、すべては後の祭となり、中途における降伏も白旗もなん

の役にも立たず、今日蘭人は世界のどこにおいても、また誰からも相手にはされぬ故國なき流浪の民となり果てたのである。

このよき實例こそ、濠洲に對して言葉による百萬の忠告にも勝る現實でなければならぬと信ずる。

### 米英デマ放送の馬脚

最近になり漸く米英の國民は、自國政府の宣傳に迷はされて日本の實力を過少に評價してゐたといふことに氣づくと共に、ひた隠しに隠されてゐた相次ぐ敗戦の事實を知るに及んで、今更のやうに狼狽し、自國政府の無能振りを責め立て、更に米英共にお互ひに誹謗し合つて深刻な内輪もめを演じてゐる有様で



ある。

即ちアメリカにおいては、さすが戦争に呑氣な國民も珊瑚海海戦の敗北に氣がつき、當局が沈黙を守るのは一敗地に塗れた證據であるとし、ニューヨーク・タイムス紙の如きは「もし聯合國側が勝利を博してゐるならば、當局は何故沈黙し、公表を遅らせるのか」と難じてゐる。

シカゴ・トリビューンの如きは「イギリスはアメリカをしてロンドン政府の政策に盲従せしめんとする老獯極まる行動をとつてゐる。特に最近のアメリカの輿論はイギリスの使噓に依る謀略輿論である」と論じてゐる。最早イギリスのお先棒は御免だと訴へてゐるほどである。

一方イギリスにおいても、チャーチルが國民の非難に答へて、

「戦争の結果は神様だけが知ることである。誰も戦争を左右することは出来な」と例の涼しい顔をしてすまじ込んでゐるのに對し、前陸軍大臣ベリシヤ

や、A B C D對日包圍陣結成に暗躍したダフ・クーパーの如きも、イギリス帝國の危機を警告し、多年日本にゐた新聞記者ヒュー・バイアスの如きも「日本の實力を過少評價するな」と警告してゐるなど、その狼狽振りが察せられるのである。米英の失敗は日本を甘く見たからであつて、その結果今や彼等國民の中から、自國政府攻撃の聲となり、そのほかルーズヴェルトも遂に「アメリカの船腹状態は非常に悪化して來た。アメリカ人は問題の重大性に目醒めなければならぬ」と告白するに至つてゐるのである。

かゝる現實を濠洲は冷静に、勇敢に認識すべきである。石油なく、ゴムなく、艦船なく、しかも人口少く、海上權さへ持つてゐない濠洲が、何故無益の戦争を敢へてしようとするのか、まことに判断に苦しむものである。もし敢へて戦はんとすれば、われに濠洲撃滅の成算がある。また和して提携せんとすれば、われわれは善隣としてこれを迎へるに吝かではない。



### デエゴ・スワレス奇襲の凱歌

シドニー軍港強襲と日も同じ五月三十一日、わが特殊潜航艇は、印度洋はるか彼方マダガスカル島に奇襲作戦を展開したのであつた。

即ち英米が、丁度一箇月前、理不盡にも占領した佛領マダガスカル島の北端の英海軍前進根據地であるデエゴ・スワレス港に在泊する英艦隊を奇襲し、見事港内突入に成功、英戦艦クキン・エリザベス型一隻、同じく輕巡アレシューサ型一隻を撃破し去つたのである。(その後の調査により撃沈せること判明) デエゴ・スワレスは、マダガスカル島の海岸都市中第一の要港で、人口一萬數千、灣内の廣さはリオ・デ・ジャネイロ、ブレストに次いで世界第三位、しかも灣内の水は深く周圍に山を繞らしてゐるので船舶の碇泊は極めて安全であ

る。その港灣施設は殆ど完備し、棧橋、波止場、倉庫、乾船渠、造船所等がある。乾船渠は二萬四千トン級の船を收容し得るものである。

この灣内に碇泊してゐて、我が特殊潜航艇の餌食となつた戦艦と同じ艦型の英戦艦クキン・エリザベスは一九一五年一月、前大戦中に竣工、ジュットランド海戦にも参加してゐる。



排水量三萬千百トン、英の現有戦艦では最も古いものではあるが、一九三七年から四〇年にかけて改装を施し、二十五ノットの快速と、主砲三十八センチ八門、副砲十五センチ八門の威力と相まつて依然同海軍の中心勢力をなしてゐた。昨年頃は東地中海艦隊に屬してアレキサン

ドリヤにあり、昨年末伊海軍の襲撃を受けて僚艦ヴァリアントと共に損傷を受



け暫く入渠してゐたはずである。同型艦にはヴァリアント、マラヤ、珊瑚海海  
戦で損傷を受けたウォスバイト及び獨潛艦のため先に撃沈されたパーラムがあ  
る、乗組員は千二百五十名である。

これについて、英乙巡アレスーサは、排水量五千二百二十トン、一九三五  
年五月竣工、速力三二・二五ノット、主砲十五センチ六門、副砲として十セン  
チ高角砲八門を持つものである。同艦は大東亞戦前シンガポール方面にゐた  
が、同軍港陥落の際わが攻撃を受けて辛うじて印度洋に逃避し、さらにマダガ  
スカル島に據つてゐたもので、西に西にと落ちのびた擧句、撃破された同艦の  
運命は英海軍のそれを象徴するものとして興味深いものがある。

「米英艦隊撃滅」(増補版)の中に述べてゐるやうに、すでに印度洋東半部を制  
歴中のわが海軍が、遠くアフリカ東岸までも英國艦隊を追つて作戦してゐるの  
である。この事は、インドにとつても、更にまた近東にとつても、次第に重大

な影響を及ぼすことと確信するものである。これはイギリスの海軍力は、日一  
日と凋落の一路をたどつてゐることを如實に證明するものである。われわれは  
この明快なる意志表示をもつて、イギリスの生命線であるインド及び近東線が  
遠からず遮断せられることを豫言するものである。それと共に、南洋圏の確保  
を更に強化し、大戦略態勢を形成したところの帝國が、早くも強力なる戦力を  
蓄積して、東へも、西へも、南へも、更に大攻勢を開始し得る戦力を整備した  
ことを、世界に向つて表示し得るものと思ふのである。

いづれ英國艦隊もたまりかねて、或ひは印度洋の東へ盲進して來るかも知れ  
ないが、この孫子のいはゆる「憤兵」これこそは、前から屢々云ふやうに、わ  
が方の思ふ壺である。

かくて、第二、第三の我が術中に陥ることと信ずる。

更に英米の誇稱するやうに、歐洲第二戦線などを悠長にやつてゐる限り、帝



國海軍は獨伊に呼應して、インド洋を徹底的に膺懲し廻るであらう。敵艦隊がインド洋に兵力を集中して来れば、前に云ふ通り、我が術中に陥るのは必然であり、イギリスにとつては進退兩難と稱すべき時が迫つたのである。

チャーチルの如き政治家が、イギリス海軍の統帥を左右してゐる限り、イギリス海軍の作戦は前大戦のダーダネルス攻略の大失敗や、今次大戦のマレー沖海戦、或ひはセイロン島沖の敗戦のやうに、失敗に次ぐ失敗を重ねるであらうことは、昔から兵術の原則がこれを警めてゐるところである。

統帥権問題の喧しいのも、そこから來てゐるのである。

英米海軍指揮官も、實は氣の毒な點もあるので、チャーチル、ルーズヴェルト等の政治家が作戦を實質的に左右してゐる限り、作戦的のよい手が打てるはずはないのである。これに氣づかない限り、英米の海軍は、凋落の一途をたどるより他ないと信ずるのである。

### 三、東太平洋への新作戦

#### ミッドウエーの刺違へ戦法

南濠へ、南阿へと、突如日を同じくして、長驅奇襲せる帝國海軍は、さらに文字通り雄渾なる大構想のもとに、太平洋の北端を破摧し、さらに東太平洋の中核ミッドウエーを強襲、大本營發表のごとき戦果をあげたのであつた。

今まで行はれた我が海軍の作戦は、いづれの場合においても、なるべく早く敵の艦隊をひきつけて撃滅しようといふのが目的である。このなるべく早くひきつけるにはどうすればよいか、これが問題であつて、若し敵が引つけられな



いで本國の港に入つてゐれば、いつまで経つても戦争は終らないのである。いはゆる長期戦になる。それを避けるためには、出来るだけ早く敵をひきつけ、早く撃滅するといふことが必要になつて来るのである。

こゝに珊瑚海海戦が起り、二隻の航空母艦をやつつけたのであるが、まだ四隻が残つてゐる。この四隻を早くやつつけてしまひたい。さうすれば、日本國民はしばし枕を高くすることが出来るし、又戦争を短期に終らせる望みが大くなるわけである。

この爲に残りの航空母艦を一舉に撃滅せしめるといふのが今度のミッドウェー海戦の目的であつた。ところが、敵は恐れをなしたか、なか／＼出て來ない。僅かに引よせられて出て來たのもミッドウェーの岸近くまでである。

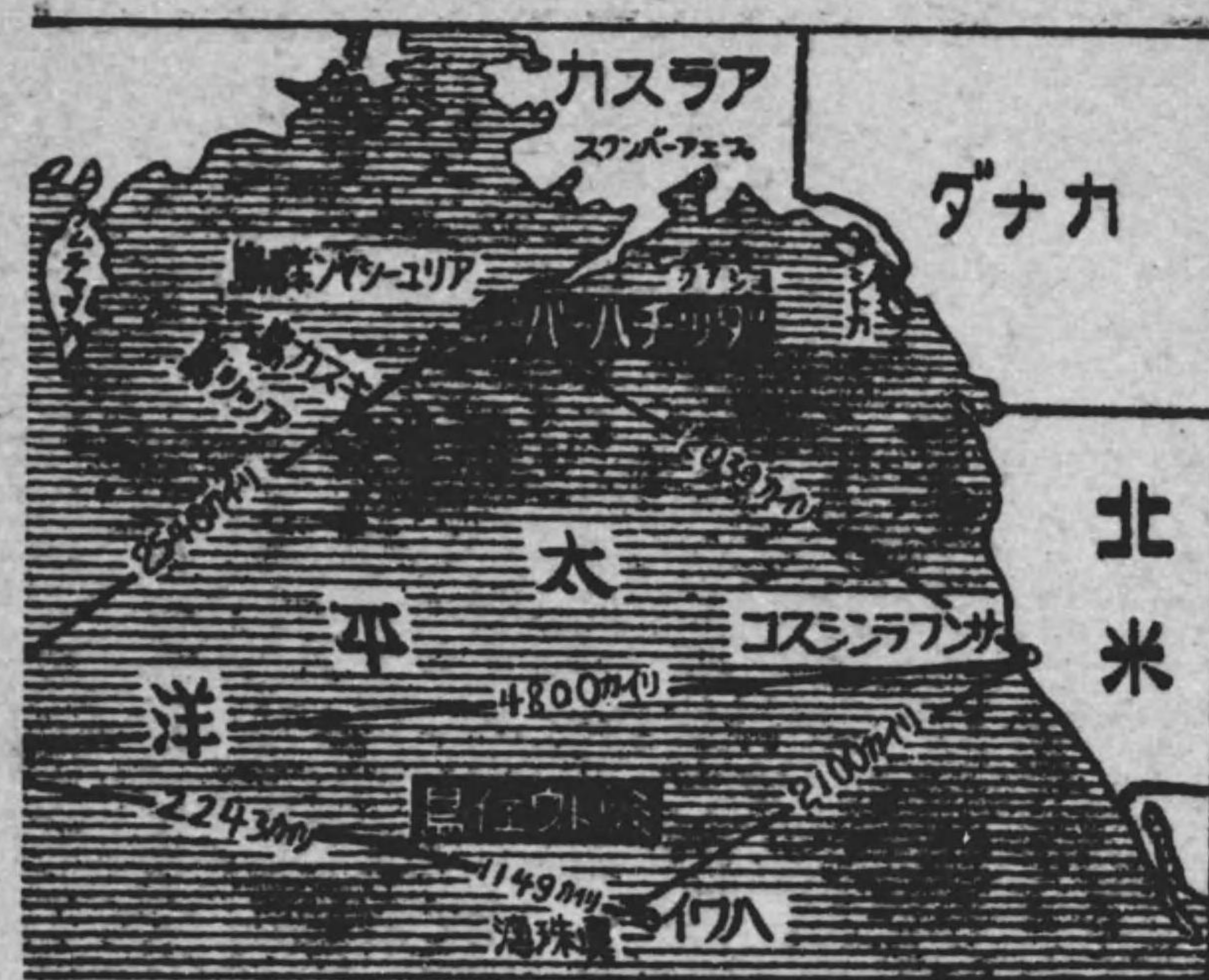
それと同時に、ミッドウェーには、陸軍の航空指令官が引率した相當有力な航空部隊が派遣され、ミッドウェーを中心として、盛んにその附近を活動して

をつた。その活動圏内から彼等は少しも出て來ようとしなない。この陸上基地から飛出す飛行機は、空母の飛行機に比べてずつと大きく、速力も早く、爆弾や魚雷を抱いてゐる量も多く、非常に有力である。これが保護し得る範圍に敵の艦隊も航空母艦もゐるのであつて、それから一步も出て來ない。これではこちらの考へてゐるやうに、近くに引よせて叩くといふわけにいかぬ。早く敵らうとすれば、そこまで出掛けて行つて叩かなければならんといふことになる。

しかし、出掛けて行つて叩くことは容易なことではない。古來どの例を見ても、敵の海上に出て行つて撃滅するといふことは容易ではない。しかし、いつまでも自分の方の艦隊が損傷をしないやうにといふ考へからだけでやつてゐる戦争は絶対に勝てない。

單に護りが堅いといふだけでは、勝つ時期を早くすることは出来ない。勝つ時期を早くするには、護るより、積極的に攻勢に出るといふことが必要になつ





て来る。  
 この積極的攻勢に出で、早く敵をやつつけるといふことを考へると、味方の損害をのみ案じて躊躇してゐるわけには行かない。しかし、それが戦争を早く勝利に導く方法である。

そこにミッドウェー海戦といふものゝ意義があるわけである。かくして我が有力なる艦隊は敵に向つて出撃し、戦端が開かれたのである。



洋全海域より完全に驅逐し、今や作戦は一轉して東太平洋全海域への一大新展開を見るに至つたのである。

敵勢力を徹底的に撃滅せざんばやまぬ我が海軍部隊は、六月五日、敵アメリカの前進根據地であるミッドウェーを急襲し、重大なる損害を與へた。更に同方面作戦中の一部隊は、同日、敵の航空母艦群を誘き出し、これと猛烈なる格闘戦を演じ、ホーネット型航空母艦一隻を大破し、エンタープライズ型航空母艦一隻を撃沈、さらに甲巡一隻その他を撃沈したのであつた。大破したホーネット型航空母艦は、その翌々日の七日、我が潜水艦を以て止めを刺し、確實に撃



沈したのであつた。

我が方の損害は、全作戦を通じて、敵航空母艦群との格闘により、乃至は敵潜水艦に依り、航空母艦一隻を失つたほか、航空母艦及び巡洋艦各一隻大破、未だ還らざる飛行機三十五機の損害と云ふ、尊き犠牲を拂つた事實から考へても、いかに壯烈な撃滅戦が展開されたか、想像に餘りあるものがあらう。

さて、ミッドウェー方面の海戦について考へると、敵の最も痛い前進基地を空襲を以て強打することに依り、残存の敵航空母艦を誘き出し、強襲に依つて之を撃破せんとした作戦と云ふことが出来る。こゝに奥深い日本流の兵術の眞髓があるのである。

「わが海軍魂」の發露である、肉を斬らせて骨を斬るといふ戦法である。ハワイ海戦以來、珊瑚海海戦までに、戦艦、航空母艦の多數が撃破されたアメリカの海軍兵力において、骨と云ふべきは全部で三隻乃至四隻の残存航空母艦であ

つたことは、何人も判断しうる所である。これを撃滅してしまへば、相當の期間には海上権の再建はできなくなる道理である。これが爲には、我が海軍が多數の航空母艦を保有してをる現在、一艦を以て敵一艦を殲す、所謂一艦一殺主義で刺達へても少しも差支へないのである。

目的はたゞ如何にして敵航空母艦をひきつけて之を殲すかといふ一點にあつたわけである。

この點に於て、我が勇猛なる山本聯合艦隊司令長官が徹底したる戦法を敢行することに依つて、容易なことでは捕捉しえない敵の虎の子の残存航空母艦を撃滅せんとし、且つその目的の過半を達したものと稱することが出来るのである。

味方の損害が皆無で、敵の骨を断ち得れば、勿論それは上の上であるが、そのやうな生優しい決心では、敵の骨には達し得ない。現にミッドウェー附近の海戦に於て、敵航空母艦群は、我が企圖どほり誘き出されて來たには來たが、



ミッドウエーの有力なる航空基地附近にへばり附いて、それから一步も出て来ない。その爲に我が方は、基地航空兵力と戦ひ、同時に敵航空母艦群とも戦ふといふ刺し違への戦法に出て、同方面に敵の保有航空母艦中、最も有力なるホーネット型一隻、他の一隻とを撃沈し、基地飛行機と母艦飛行機とを合せて約百五十機を撃墜したのであつて、我が方も航空母艦一隻を失ひ、他に航空母艦及び巡洋艦各一隻を大破したのであるが、北部及び東部太平洋に互る雄渾なる作戦目的を達成する爲には、洵に已むを得ない次第であり、我等海軍將兵は、この戦法に徹してをるのであるが、その凄絶なる激戦の様は、思ふだに手に汗を握らざるを得ない次第である。

日本の航空母艦の損害について、今後いくらか心細いではないかと思ふ向きがないでもないかと思ふ。しかし、この事だけは申し上げておきたい。

日本の海軍といふものは宣傳のための海軍ではなくして、真に敵を撃ち破るための海軍

である。アメリカのごとく一隻できれば二隻できたらやうに宣傳するやうなことはしない。日本はたとへ〇〇隻あつても敵に知られずに済めば黙つてをる。零だといつてをる。これが、我が海軍の方針である。従つて、その航空母艦が一隻や二隻損傷しても、われ／＼は驚かない。われ／＼としては敵を二隻やつつける場合に、こちらも二隻犠牲にする刺違戦法、或ひは一艦一殺主義といふ覺悟でなければいけない、かう考へてゐるわけである。

ミッドウエー方面の海戦に於ける我が勢力は、航空母艦からくる敵機と、その外にハワイから増援にきた陸上からの敵航空隊、この二つの力を凌いでゐたのである。我が方は敵のごとく陸上兵力はなくて航空母艦兵力である。その相違があつて、しかも實によく奮闘し、敵を完全に叩きつけ航空母艦を二隻撃沈したのである。この戦闘によつて我が方に空母一隻沈没、一隻大破と云ふ大きな損害があつたといふことは甚だ遺憾なことである。遺憾は遺憾であるが、戦争といふものは敵も傷つけるが味方も傷つく、これは當然の話である。たゞ今までの戦闘があまりに豫想外にうまくいったために、國民の中には勿論のことわれ／＼海軍部内に於いてさへ、戦争といふものは案外楽なものだ案外損傷のないものだ



といふ觀念を持つたことは蔽ひ難い事實である。しかし、それは普通の一般のことではない、この戦争開始以來除外例的にあまりにうまくいったのであつて、普通の戦闘であれば敵に五分の怪我があれば、味方にも五分の怪我があつて當然である。非常な兵力の差のあるときには別であるが、對等の場合に於いては、對等の怪我をするのが常識である。この對等の場合の常識を今まで撃ち破つてきたといふことは日本の訓練の結果であり、また兵術の優秀性、兵器の優秀性のためであり、精神力が卓越してをることによるものである。しかし敵の方が非常に優秀な場合、味方がそれよりも兵力の劣つてゐる場合に於いては、相當の損害ができるといふことは已を得ないことであつて、これはどうすることもできない。従つて今度の戦闘に於いて條件の悪い敵の陸上航空隊の勢力圏内で戦ふ場合、味方にも相當の損害があるといふことは、始めから覺悟してをつたのである。あの被害をみて意外に思ふものは海軍部内には一人もゐないのである。

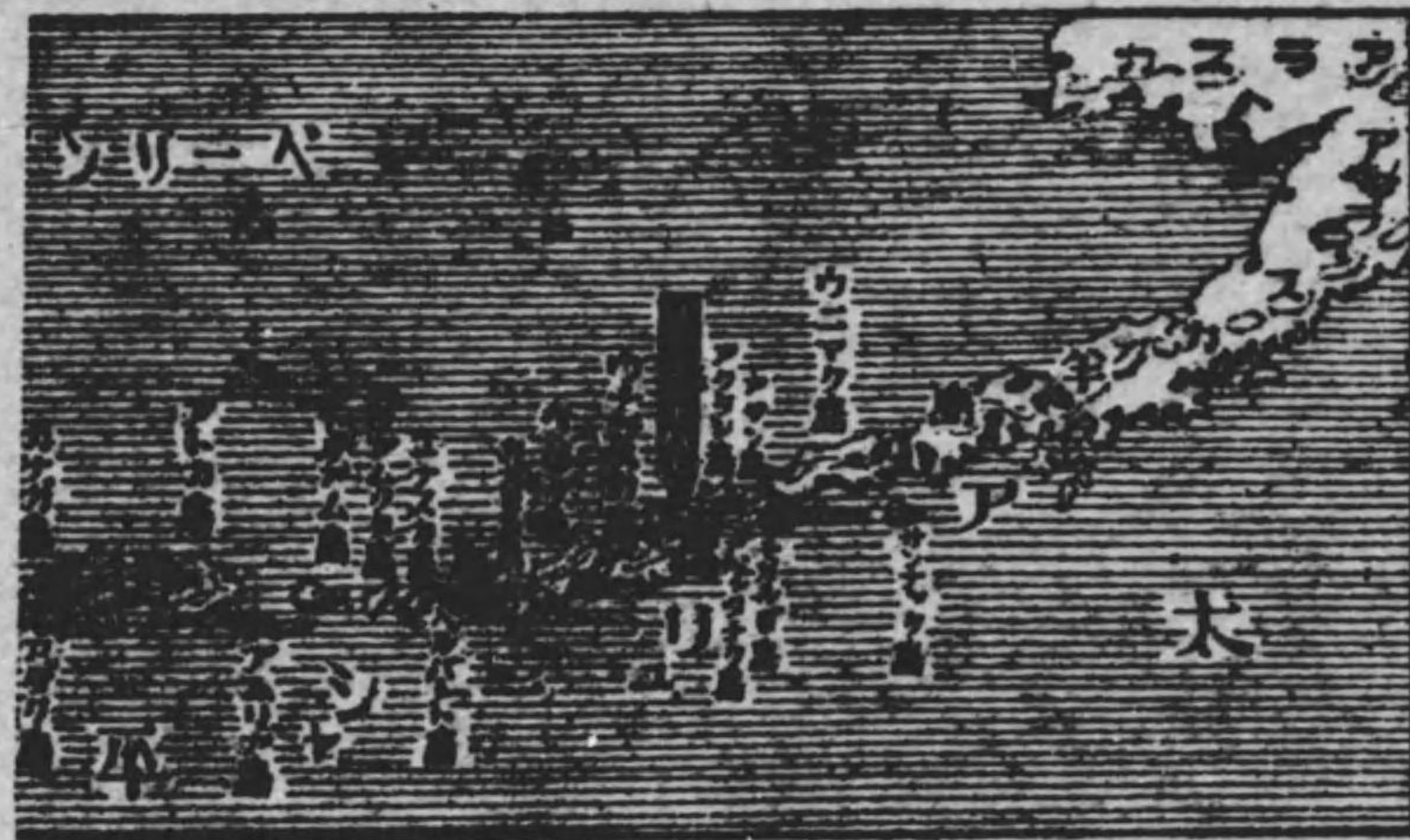
### アリユーション群島の猛攻

この戦闘と殆んど時を同じうして、他の我が海軍部隊は、アリユーション群島の要點であるダッチハーバーに對し六月四日五日の兩日に互り、有效なる奇襲を反覆して、多數の敵飛行艇、大型爆撃機を撃墜破し、同時に、大型輸送船一隻を撃沈し、大油槽數個、及び格納庫などを爆破炎上せしめ、敵航空基地に甚大なる損害を與へたのであつた。

我が方にあつては、小型機五機が自爆したほか損害はない。

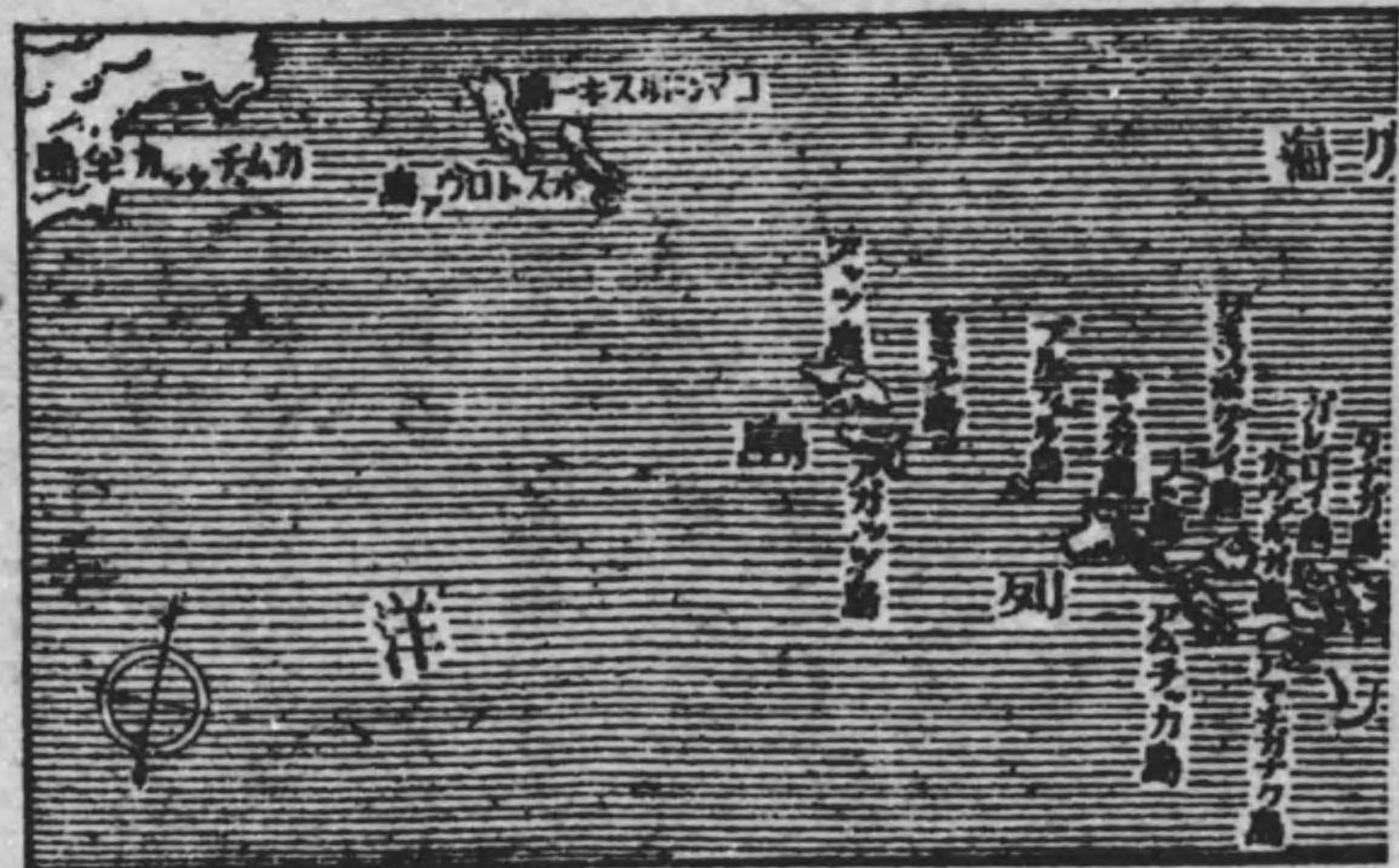
このアリユーション群島は元來、ロシア領であり、一八八〇年代の末ごろ米國は一エーカーを一セントの割で買ひ、全島の値段僅か數百萬ドルであつたと





いふ。この地形は、アラスカ半島からベーリング海へ弓なりに突出した長さ一千百哩、百五十の島から出来てゐる。そして我が北千島に對して、僅か五六百哩のところに當る。北海道まで千哩足らず、東京とダッチハーバーは、サンフランシスコとダッチハーバーに匹敵して距離は四千五百キロ程度に當る重大な地點である。

ダッチハーバーは、アラスカ全體の第一の軍港であり、アメリカの宣傳によると、支那事變以來、何億ドルの金をかけ、飛行場も數ヶ所に近代設備をほどこしてゐたのである。



アリューシャン列島には、このウナラスカ島のダッチハーバーのほか一般に知られてゐる軍事據點だけでも、西端のアッツ島には、空軍と潜水艦基地があり。その近くのキスカ島も戦前から、上陸を禁止して、軍備に狂奔してゐたのである。定住者は二千人以上の小都會である。この列島の南側を例の黒潮が流れてゐるが、ベーリング海のなかは、獨特の環状潮流があり、各島間の潮流も複雑で航行には難儀をするところである。

列島は悉く火山である。

富士山に似た秀麗な、海拔八千尺から一萬尺の活火山が煙を噴き、雄大な風



景を展開してゐる。

山には、樹木は一本もない。裾野には、黒百合、みやまりんどう、釣鐘草などの高山植物が咲き亂れ、その間を雷鳥が、飛び廻つてゐるところだが、島には、天然の良港が必ずあつて、水深は投錨には少し深すぎるくらいで、大抵二十尋程度、暗礁は少く、灣内は全くといつて、位に波がなく、霧も灣内では舞れてゐる。その無數の良灣の中で最良なのはウナラスカ灣で、小さい方は、キスカ灣がある。ウナラスカ灣内に小島があつて、それがまた小さいが良好な灣を抱いてゐる。これが、ダッチハーバーである。

ダッチハーバーには、その棧橋へ二萬トンの船舶が横付けになつた記録がある。しかし、ダッチハーバーとウナラスカ部落の間の海峡はせまくて、三、四千トン級艦船を通す程度である。

### 同時作戦の成功

わが海軍部隊は、六月五日ミッドウエーを強襲し、残存アメリカ航空母艦群に猛攻を加へ、エンタープライズ型一隻、ホーネット型一隻の外中巡一隻、潜水艦一隻を撃沈し、同島所在の敵太平洋残存航空兵力の殆ど全部を潰滅状態に陥らしめたのであるが、ミッドウエー海戦は、アリューシャン作戦と共に、アメリカの残存海上兵力をアメリカ本土に壓迫し、わが太平洋作戦の轉換を劃したところに大きな意義があり、また一面、アメリカ太平洋作戦の根幹をなす航空母艦を潰滅したことは、太平洋におけるアメリカの戦力を決定的に低下したもので、アメリカが如何にデマ宣傳しようともわが方の壓倒的勝利といふこの敵たる事實は否定すべくもない。

さてこの日の戦況は同島付近の海域は東南東の風強く、特有の長いうねりは艦艇を大きく揺すり、雨こそ降らぬが厚い雲層は二千メートルの上空に立ちこめてゐた。



だがわが海軍部隊は、求敵必滅の意氣に燃え立つてゐた。午前九時日本時間には、わが艦上機は母艦から次々と進發した。午前十一時四十分敵機から

『巡洋艦五隻とエンタープライズ型一隻から成るアメリカ艦隊がミッドウエー北方〇〇哩を北上中』

との快報がもたらされた。直ちにわが母艦からは待機中の艦上機が勇躍とび立つた。その後ホーネット型は巡洋艦五隻、驅逐艦十二隻に護衛され、兩艦とも堂々たる輪型陣をもつて進航しつゝあつた。したがつてこれ等が一齊に射ち出す防空彈幕はいかばかりかと思像されるのであるが、攻撃に参加した勇士の話では「スコールを逆さにしたやうだつた」といふことである。

しかしわが必殺の攻撃に狂ひはない、まづエンタープライズ型に猛攻が加へられた。同艦は直ちに戦闘機を放ち、彈幕を張りながら卅餘ノットの速力で必死の逃走を企てたが、わが第一彈を受けて早くも飛行甲板より煙を吐き、やがて命中彈六彈によつて全艦大火災に包まれながら海中に没し去つた。

エンタープライズが撃沈されてから二時間半にしてホーネット型を發見、たゞちに攻撃が集中され、合計三發の魚雷を喰つてホーネット型は見る見る左舷に大傾斜した。しかしこの日の空戦はこれで終り、翌々七日午後、わが部隊はハワイ目指して必死の遁走を試みるホーネット型を再び捕捉し、潜水艦によつて最後の止めを刺したのである。

ハワイ海戦以來、闘志満々たるわが海軍の傳統は、本海戦においても遺憾なく發揮され、ホーネット型を攻撃したわが或る飛行機群の指揮官は敵に致命的な攻撃をくはへたらへ、わが身もろとも敵の艦橋めがけて壯烈な自爆をとげてゐる。この指揮官はこの日早朝、部下を指揮してミッドウエー島を爆撃、目的を果して歸艦したのであるが、このときすでに「敵航空母艦發見」の報が入つてゐた。一刻も猶餘は出来ぬ、しかも残念なことは指揮官機以下敵彈によつて相當の損傷を受け、當然修理すべき状態にある。だが敵を逃がしてはならぬ、指揮官は直ちにあたらしく魚雷を積み込み、再び部下の編隊を引き具して飛び立つたのである。したがつて攻撃中もタンクからはガソリンが洩れ、破られた翼は操縦に困難だつたことと思はれる。しかし、撃滅に燃ゆる決意の前にはもの數ではない。



目的を達したうへ敢然自爆したのであるが、指揮官機同様既に傷ついてゐた部下の各機が指揮官機の後を追うて自爆したことはいふまでもない。

この「撃滅せよば止まぬ」一念凝つて、敵艦に自爆した勇士達の最後こそ、日本武士道の華、その誠忠は萬古不易の香りを戦史に留めるものであらう。

またミッドウエー沖海戦と日と同じうして、グッチハーバー強襲が敢行されたが、こゝにもわが海軍魂は、遺憾なく發揮されてゐる。

この日北太平洋の風浪荒く、雲霧深くたれこめて非常な悪天候であつたが、如何なる困難をも突破して、作戦は遂行されねばならぬ。

目的地の上空は一層物凄い密雲に蔽はれて、急降下爆撃は至難な状況である、沈着な指揮官はやうやく一ヶ所だけ僅かに雲の切れまのあるを發見したが、爆音を聞きつけた敵の防空砲火はこの切れ間から奔流の如く噴き上げて来る。だがこれにひるむ海軍ではない。指揮官は突撃を命ずると共に先頭に立つて雲を突き切つて敵に襲ひかかり軍事施設を風潰しに潰滅せしめ、編隊を整へて歸途についた。ところが途中で敵戦闘機數十機と遭遇、壯

烈な空中戦を展開、卅分の激闘の後、敵を完全に敗退せしめ、指揮官は再び味方編隊に集合を命じた。この時唯一機見當らぬ、指揮官は止むなく「單獨歸投せよ」と無電で命じ編隊を率ゐて母艦に歸つたのである。

やがて見失つた〇〇機との連絡がついた。〇〇機は敵機を射落したのち、無念敵弾を受け通信機も故障を起したが、沈着大膽な〇〇機の二勇士はこれを修理し傷ついた機體を巧みに操縦しながら、編隊の後を追うて歸途にあつたのである。しかし燃料も残り少く、まさに日没である、母艦では一同氣をもんでこの機の歸艦を祈るばかりだが、一時間たち一時間半たつても姿を見せぬ、たゞ無電で状況をつたへるばかりである。やがて北洋の空は全く闇に包まれてしまつた。燃料は既に盡き果てる時刻である、〇〇機からは「他に歸らざる機ありや」と苦難と闘ふ自分のことは忘れて、戦友を思ふ無電があり、やがて

「お許し下さる」

「燃料あと十分間」

との無電があつたのであるが、間もなく「天皇陛下萬歳」の受信を最後に電信は杜絶



え、〇〇機は遂に母艦に還らなかつたのである。空の死闘二時間、最後まで戦友の身の上を案じ自分の戦功を語らず貴重な飛行機を失ふは自分の至らなかつたための失敗としてお上にお詫を申上げてゐる。軍人精神至純の發露と申さねばならぬ。この兩勇士は廿一歳と廿二歳の若鷲である。

#### 四、敵の反撃企圖粉碎

##### ソロモン海戦の大戦果

帝國海軍による各海戦を概説して來たのであるが、この様な引續く敗戦によつて、米英の打撃は、軍事上においても、いよ／＼深刻化するに至り、この窮状を何とかして打開しなければならぬ必要に迫られて來た。

少くとも銷沈する國民の志氣を鼓舞するため、早急に何等かの方策に出なければならぬ羽目に追ひ込まれてゐたと認められるのである。したがつて、ルーズベルト初め、アメリカ當局が、最近しきりに對日一齊反撃を呼號し出したの



は決して故なしとしないのである。ところが流石の彼等も、例のやうな口先だけの宣傳によつては、最早や國民の志氣を鼓舞振起出來ないのを知つてゐるので、まづ支那を基地とする空軍の對日反撃に期待をかけた。しかしこの期待はわが陸軍部隊の先制的猛攻によつて、完全に粉碎されてしまつた。

次いで敵は、大島島方面に對して反撃を試みようとしたのであるが、儼然たるわが防備の前には齒が立たず、反撃の企圖を放棄せざるを得なかつた。だが敵はなほも躍起となつて對日反撃の蠢動を續けてゐたのである。

ことに、ルーズベルトは歐洲における獨伊の壓倒的攻勢を太平洋方面において牽制せんものと企圖し、巡洋艦、驅逐艦、航空兵力等より成る有力な艦隊を新たに編成し、大輸送船團を擁して、ソロモン群島方面に出撃し來つたのである。手具腰引いて待つわが海軍部隊が、これを見逃がそう筈はない。こゝに壯烈なソロモン海戦が展開され、わが必殺の猛攻に敵艦隊は滅滅的打撃を受けた

のである。今ソロモン海戦の戦闘概況を述べて見やう。

八月七日午前、大輸送船團を擁した新編成の米英聯合艦隊は南海特有のスクールと、折柄の霧を利用してわが最前線であるソロモン群島の一角にとりついた。これを発見したわが哨戒機は直ちに基地に向け打電した。

#### 「敵艦隊見ゆ」

の快報に勇躍した基地では、時を移さず新鋭の戦闘機隊、攻撃隊が前後して堂々發進した。南海の空を蔽はんばかりにして、敵の上空に殺倒したわが編隊群は熾烈な敵防禦砲火を冒して敵艦隊援護の敵空軍に突撃する。

敵の編隊は、必殺の意氣もの凄いわが航空部隊の勢ひに抗し難く、たちまちにして敵グラマン戦闘機四十九機は見る／＼撃墜され、敵戦闘兼爆撃機九機もまた海中に叩き落されてしまつた。戦闘機隊會戦の間にわが攻撃機隊は、敵驅逐艦一隻を撃沈し、他の一隻を大破させた。



越えて八日——この日所在のわが航空部隊の雷撃隊はその全力をあげて進撃し、その第一陣は、まづ敵艦隊に突つ込んで行つた。敵必死の防禦砲火もものは、應戦の勇士達は、超低空をもつて敵艦隊に肉迫し、その旗艦米甲巡ウイチタ型を、たちまちにして撃沈。これを手始めに、英甲巡（艦型不詳）一隻を轟沈、乙巡、驅逐艦各二隻を屠り、さらに甲巡一隻を大破せしめた。

一方他の雷撃隊は、同方面に碇泊中の大輸送船團に襲ひかかり、一機一船、必殺の肉迫戦法は見事功を奏して、敵船團は次ぎ／＼に天に沖する水煙りと共に海底深く屠り去られた。撃沈實に十隻大破沈没に瀕するもの一隻といふ大戦果であつた。

さらに夜に入るや、わが水上艦艇は枚を衝み堂々と戦場に進入した。敵艦隊は徒らに遊弋してゐるだけで、まだわが方の進入に氣がつかぬ完全に敵の虚をついたのである。指揮艦を先頭に堂々進撃するわが艦隊はまづ甲巡アストリア

型に砲火を開く。光芒二閃、照射すると見るや瞬時にしてこれを撃沈してしまつた。夜戦はわが得意とするところ敵の二番艦、三番艦も脆くも、われに一太刀を浴びせることも出来ず、次々に沈没して行つた。夜襲に狼狽した敵艦隊は主砲副砲を旋回する暇さへなかつたのである。

しかもこの夜戦には、晝間の撃滅戦に意氣あがる航空部隊並びに潜水艦が参加、三位一體の立體戦の妙を發揮し、敵艦隊中旗艦（第一に撃沈した旗艦とは別の旗艦）を初め甲巡七隻、乙巡オマハ型一隻、驅逐艦六隻を撃沈し驅逐艦二隻を大破せしめたのである。

明けて九月には一齊追撃戦に出動したわが雷撃隊は、ソロモン南方の洋上で英乙巡アキリーズ型が、單艦戦場を離脱して、シドニーに向け必死の遁走を試みつゝあるを發見、「逃がしてなるものか」と猛然襲ひかかり、難なくこれを撃沈した。また輸送船團の敵兵の一部は揚陸されたが、わが海軍部隊の猛攻に再



び輸送船に逃げ歸つて船諸共沈められる始末であつた。

### 濠洲全く孤立化

ソロモン海戦の戦果は、撃沈したものの巡洋艦十三隻、驅逐艦九隻、潜水艦三隻、船舶十隻で撃破したものを合すると軍艦の撃沈破二十九隻、輸送船十一隻といふ大戦果であつた。近代海戦史において、これだけ多数の艦船を一舉に撃滅したことは嘗つてその例がないばかりでなく、これに對しわが方の損害が飛行機の自爆したもの二十一機、巡洋艦二隻が輕傷を受けたが戦闘航海に差支ない程度であつたといふことも亦類例を見ないのである。

敵艦隊は、アメリカの最新鋭巡洋艦ウイチイ及びアストリア型甲巡二隻を旗

艦としアメリカの巡洋艦群を中心とし、これに濠洲艦隊、ニュージーランド艦隊所屬のイギリス巡洋艦を動員した米英聯合艦隊であつた。敵はこの有力な大艦隊をもつて輸送船團を護送し、わが最前線の最も脆弱點であらうと考へたソロモン群島に反撃を加へ、こゝを足場として頽勢挽回の態勢を整へんと企圖したもののやうであるが、わが方に逆手を取られ、敢へなくも潰滅し去つたのである。これを戰略的に観ると次の諸點が數へられよう。

一、今回の艦隊編成を見るに、巡洋艦群を中心としてゐるのであるが、これは明かに戦艦の不足を物語るものであり、敵海上戦力の決定的低下を自ら證明するものである。

一、本海戦によつて、濠洲方面における敵海上勢力は潰滅的打撃を受け、わが制海権はいよゝ強化され、濠洲は全く孤立化するに至つた。

一、本海戦の影響は東太平洋、印度洋に對する制壓の度を増すばかりでな



く、敵巡洋艦を多量に撃沈したことは延いて大西洋方面における獨伊の通商破壊戦をいよゝゝ有利に展開せしめるであらう。

今回の反撃については、アメリカ海軍が「アメリカが始めて取つた大攻勢である」と豪語してゐる點からしても敵が何を企圖し、また如何に大きな期待をかけてゐたか想像されるのであるが、それだけに、この結果に對する打撃も亦如何に深刻であつたかが思ひやられるのである。

### 米・濠の苦悶愈深刻

アメリカはソロモン群島方面への出撃と前後して、アリューシャン方面へも

出撃を試みんとしたのであるが、大本營發表の通り、同方面のわが海軍部隊によつて撃退された。

アメリカ當局が相次ぐ敗戦を糊塗して、ひたすらデマ宣傳によつて國民志氣を狩り立てる一方、濠洲をその手中につなぎ止めんと狂弄して來たことは、前にも述べたのであるが、今回のソロモン海戦に至つては、珍らしくも、まづ海戦の事實を認め、次いで輸送船の損害を發表するなどの處置に出てゐる。これは流石デマ宣傳の天才にとつても、國民の目から秘匿するには、事實が餘りにも大き過ぎたことを物語るものと云へやう。また最近アメリカ國民が政府のデマ宣傳を信用しなくなつたことも蔽ひ得ない事實である。最近ではアメリカの國民は「日本の艦隊は撃沈されてもすぐ浮び上つて戦場に參加する不思議な艦隊である」と云つてゐる。これはアメリカ政府のデマ宣傳に當然な皮肉である。



もと／＼アメリカの指導者達は、各出先部隊のデマ報告に惑はされたのか、デマ報告と知りながら敢へてこれを宣傳してゐたかは別として、對日反撃は易々たるものであると國民を信じさせてゐたやうである。また一面彼等が日本の戦力をあくまで過少評價してゐたことも争へない處である。もしも彼等指導者達が日本の實力を知り、もつと慎重であつたならば、かゝる敗北に次ぐ敗北は重ねないで済んだかも知れぬのである。アメリカの敗戦は、このやうな下手な戦をさせてゐるルーズベルトの偽購政策によるものと云ふべく、「ルーズベルトの偽購政策米海軍を亡ぼす」と云つた形である。

「マカツサル海戦」とか「珊瑚海々戦」さては「ミッドウエー海戦」等の戦勝デマ宣傳によつて、日本艦隊は既に潰滅したものと教へられてゐたアメリカ國民が、ソロモン海戦によつて米英新編聯合艦隊を撃滅したわが海軍の堂々たる布陣を知るならば、彼等の指導者の、罪深きデマ宣傳に今更愕然たるものがあらうと思はれる。

アメリカの指導者達も、これ以上デマ宣傳をもつて國民を偽購することの不可能なことに気がついたであらう。今回のソロモン海戦について、ある程度これを認めて發表せざるを得なかつたことは、最早アメリカは、わが海軍の赫赫たる戦果の前に、とうていデマ放送位では太刀打ち出来ないことを認めなければならなかつた證左と云へると思ふ。

ソロモン海戦によつて、濠洲は全く孤立化するに至つた。アメリカに依存する限り濠洲の防衛に不安なしと豪語してゐた濠洲陸相フォードの如きも

『我々は全力を戦争遂行に傾注すべく結合してゐるが、我々は今や最悪の危機に直面するに至つた』

と悲鳴をあげてゐるのである。濠洲は今こそ頼み甲斐なきアメリカに頼つてゐるはかなさを、儼たる事實の中から學ばねばならぬ。頼むべからざるを頼ん



で亡國の悲運を辿つたものは世界にその例少しとしない。ルーズベルトの僞瞞政策が、アメリカ海軍を亡ぼしつゝあると同様、アメリカに依存する濠洲がこれによつて滅亡しなければ幸である。

## 五、大東亞戰線報告

### マレー沖海戦の悲懷

さて、この邊で、私の觀て來た大東亞戰爭の硝煙いまだ去らぬ占領地域の狀況をお話しようと思ふ。

四月二十三日に、フィリッピンへ赴き、二十四日サイゴンを通つて、二十五日にサバンを通過し、マレーの各古戰場の沿岸を空から視察しながら、ベナンに入り、そこからコタバルへ行き、さらにマレー沖海戦のあつたと思はれる海面の上を飛んで昭南島へ着陸。



昭南島からスマトラのバレンバン、それからジャバのバタビヤ、バンドン、  
ジョクジャカルタ、スラバヤ、そこから有名なバリ島、バリ島からずつと飛石  
の島を傳はつてチモール島のクーバン、それから北へ向つてアンボン、アンボ  
ンから西してマカツサル、バリツクババン、それからセビベスのメナドを経て  
ダバオに着陸してルソン島にもう一遍飛んで、コレヒドールを視察し、かくて  
日本に歸つて來た譯である。

そこで、先づ人口に膾炙してゐるマレー沖海戦であるが、その戦跡のほどは  
どうであらうかと、クアンタンの沖の上空を飛行機で通りながら眺めたのであ  
つたが、たゞ波静かな海面の、あの邊だなどと思つたにすぎない。あのあたりの  
地上はうすいジャングルがあつて、海岸に出た所に河が流れこんでゐる。そこ  
に入江があり、小さな町がある。これがクアンタンの町である。近代的な建物  
が數百竝んだ程度の、割合新しい町のやうに思はれた。そして、有名なマレー

沖海戦は、そこから僅か沖の方に出た所であの壯烈な死闘が演ぜられたのであ  
る。しかし、陸上戦と違つて、海上戦は、海底にすべては秘められてしまふの  
で、もう今では何もわからないのである。もし海面が少し痛んだり、凹凸でも  
残つてゐると、あの箇所がさうであつたかと分り易いし、古戦場として記念に  
もなるが、海面はすでにすつかり平らになつて、小波が立つてゐるだけで何も  
残つてゐないのは何となく残念な氣さへした。

現地できいたことの、一、二を述べると、あの附近で主力の上陸作戦が行は  
れた十二月八日の話であるが、マレー半島の東側に非常な豪雨があつたのであ  
る。

そこで飛行機が少しも飛んで來なかつた。飛べなかつたのである。そのため  
に、上陸部隊がぐつと海岸に近寄つて來るまで見えなかつた。これはこちらに  
とつては非常な好運であつた。ハワイ攻撃の時も、あの二三日前から強い風の





ために向ふの飛行機が飛べなかつた。われ／＼の攻撃の企畫が隠匿されたことは、やはり天佑神助だと思ふ。ふだんならば當然飛ぶのに、その日は少しも飛べなかつた。この爲に我が方の作戦は順調に進行したのである。

マレー沖海戦で、二大主力艦撃沈の状況については、海軍報道班員が詳しく報告してゐるから、それ以上別につけ加へることもないが、あの撃沈直後のシンガポール



軍港は、愕然とした表情にあつた。

その出動した日、十二月九日の午後七時、長官フィリップスをのせたプリンス・オブ・ウエールズと

レバルスは、錨をあげ、しづかに岸壁を離れて行くとき、英國人は士官と云はず、女事務員にいたるまで兩艦の出動を心から讃え、ハンカチを振つて歡送して、必ずや、日本軍の上陸を妨害し惱ますであらうと、誰一人疑ふものがなかつた。

ところが、十一日の正午すぎたころ、鎮守府應舎の二階から、士官が紙片を左手に轉げるやうに降りて來た。顔は眞ッ蒼だつた、その士官は、紙片を高くさし上げて何か大きな聲で叫ぶと、ぱつたりと倒れてしまつた。彼は、通信室



にゐる重大な英海軍の弔鐘を告げる無電を受けとつたのである。

この絶望の聲をあげて卒倒した騒ぎに、何事ならんと、各室から飛び出した人々は、その士官を抱きあげ、そこにあつた紙片をとりあげて、一齊に讀みとると、いづれも、あつと驚愕の聲をあげて、のけぞつてしまつた。

應舎内の騒ぎは大きくなる。紙片は次から次へと廻される。最後には、とび出して來た英國の女事務員や交換手にいたるまで、抱きあつたまゝ、わあつと泣き出した。

彼等が、悲愁の夜を迎へたとき、誰やらが、その悲しみの沈黙を破つて、

「おい、ウエールズとレバルスが歸つて來たぞ！」と叫んだのであるが、誰も振り向きもしなかつた。そして、ウエールズとレバルスは歸つて來たことは歸つて來たのであるが、それは偉容を誇る軍艦ではなくて、我が海軍航空隊に、慘々にやられて命から／＼救ひ上げられた約五百名の負傷兵の姿だけであつたと

云はれる。

### 生れ變つた昭南軍港

かうした感慨をもつて、シンガポール、いま改めて昭南港へ入つてみた。

振りかへつてみると、昭南島へは、何遍もいつてゐる。われ／＼は屢々あの附近を通つた思ひ出を持つものである。しかし、今まで軍港だけは一度だつて入れなかつた。従つて、私は一遍もセレーター軍港といふものを見たことがなかつた。それが今度はなんの遠慮もなく日本の手で日本の昭南軍港といふ立看板を掛けて、そこに日本の旗を立て、その中に堂々と入つて行けるのだ。なんとといふ變り方であらうか。しかもそこで下働きとして復興工事に従つてゐる



のは、傲慢であつたイギリスの捕虜たちである。私はまったく感慨無量だつた。その中には相當地位の高かつた軍人も、役人もゐる。それがみんなそこで勞働に従つてゐる。こちらは勝つたが故に、この軍港を我がものとして、その設備を改善し、壊れたものを直し、やがてこれを日本の難攻不落の軍港に直すといふことは、當然であるとしてやつてゐる。まことに感慨なきを得ないのである。

彼等は十數年來巨億の金を掛けて、天下第一等の軍港を造るといつてゐた。それを今度は日本の看板を掛けて、こちらに有利に使ふのであるから、實に日本人として本懐至極である。

私が不思議に思つたのは、十何年やつて當然出来上つてゐるはずの大砲や何かが、出来上つたやうに宣傳してゐたけれども、案外にさうではないといふことである。

彼等は勝つための戦闘第一にやつたのではなく、むしろ、第一にやつたことは、官舎であつた。自分たちの住居であつた。じつにちやんとよく出来てゐる。各ギャレツチには自動車が入つてゐる。臺所には電気冷蔵庫がありと云ふ風に、非常に快適な生活を送るやうに出来てゐる。しかし、巨大な大砲の整備などといふ事は、かなり威嚇宣傳であることが分つた。悉く自己本位の順位でやつてゐる。敵を攻撃するのではなくて、自分の身を守り、快適生活をする事がまづ先決問題であつた。さういふふうな心構へでは、いかによく守つたところで、戦争には勝てないのである。たゞ守る時間が少し長くなるだけの話である。

昭南軍港の施設の破壊は、かなり大事なものが壊されてゐるが、一方ではどん／＼回復してゐる。彼等が盛んに壊していつたものの中に、やはり燃料がある。彼らは燃料が日本の手に入ることがよほど怖かつたらしい。燃料さへな



ければ日本は働けないと思つてゐたらしい。非常に燃料關係のものを念入りに壊してゐる。それから飛行場を使へないやうにしてゐる。しかし、これは吝ちな考へであつて、そんなことはどうでもよい。實際占領してしまへば、そんなものはどんなにでも回復出来る。飛行場を壊しても少しの間に回復してしまふ。昭南の町の方はあまり傷ついてゐない。

これから見てもわかるのは、軍事施設が相當破壊されてゐるのは、彼等の焦土戦術だけでなく、日本の正確な攻撃によるものも勿論ある。しかし、市街とか、病院といふやうなものは一つも壊されてゐない。官舎もちやんと残つてゐる。いかに日本の攻撃といふものが正確であるかといふことが、これでよくわかる。もし正確でなければ、街を壊すのは當り前だし、官舎も壊すことが幾らでもあるわけである。向ふが焦土戦術で焼かなかつたものはちやんと残つてゐるといふのは、こちらの攻撃が正確であつたからだ。さういふ戦争に關係のな

い家にはすこしも日本の攻撃の被害が及んでゐないことは、はつきりしてゐるのである。

しかし、何といつても、今まで主人であつた人間が捕虜になつて、それが黒い原住民たちの鞭の下に働かされてゐるのは、惨め至極な光景である。おれは米英人だと威張つてゐたが、敗戦國の惨めさ、あれを一度見たら、石に噛りついても、日本人は戦争には負けてはならぬといふ氣持ちを起すと思ふ。

だから私は、あの捕虜たちを日本に連れて來て見せたらよいと思つてゐる。イギリスとかアメリカとかいふと、何か自分達よりも、はるかに優れた民族のやうに思つてゐた連中に、彼等がみじめな捕虜となつて、おどろしなから非常に苦しい作業に使はれてゐる有様を見せたらよいと思ふのである。

昭南の市街の方はもう大分日本的になりかゝつてゐるのは、喜ばしい事であつた。



### 日本になつく原住民

一體に占領地域全體を廻つてみて、それらの原住民たちは日本に對して豫想以上に信頼してゐる。

原住民の内、今まで統治をしてゐた者たちに非常に色目を使つてゐた連中も、今は親日家といはれるやうな恰好に變つてゐる。従つて、これは親日だから雇ふとか、これは親米だからどうかいふ問題を研究する場合には、よほど根よく調べないとわからない。みんなが親日のやうな恰好に變つてゐるからだ。彼等同士にまた暗闘がある。自分がよい地位を得ようとして、あれは昔から排日だ、自分は昔から親日だといふやうに、お互ひにそれをやるのである。だか

ら、さういふ人間を相當よい地位につけるやうな場合には、非常に人選に憚りわけである。正直な子供などは、これは全然無條件で問題はない。愛國行進曲でも、軍艦マーチでも、落下傘の歌だつたか、私達が全然知らないやうな歌でもちやんと歌つてゐる。實際熱帯の子供は歌つたり、踊つたりすることが好きだから、盛んにやつてゐる。

かうした複雑な中でも、一番親日的な原住民は、セレベスのミナハサ州の住民で非常に親日的だ。殊に學生などはよい。もう自分たちが日本人になつたやうな氣でゐる。

このやうに原住民は、早くも皇軍になつき、積極的に協力してゐることは、度々報道されてゐるところであるが、私もまた到るところでこれを経験した。

従来オランダ政府は、原住民を日本人に親しませないやうにしたので、日本の實情を知らず、積極的に日本に親めるほどではなかつたやうであるが、戦争



によつてはじめて日本の實力を知り、自分達の壓制者が驅逐されるに及び、日増しに日本を慕ひ、日本に對する信頼の度を深めつゝあるやうである。ジャバで或る青年は「オランダの飛行機が飛んだことのない高い上空を日本の飛行機が飛んでゐるので、日本軍の強いのを知り、そのときはじめて日本に協力すれば安心だといふ確信が持てました」と言つてゐた。またこんな歌も作られてゐる。「スコール降れば羊が逃げる、日本くればオランダ逃げる」といふのである。單純な中にもよくその氣持を表はしてゐる。

またこんな話もある。わが陸戦隊がセレベス島のアンボンの飛行場を占領したときのことであるが、オランダ人は逸早く逃げ隠れてしまつて、これを探し出さなければならぬのであるが、原住民達は喜んでこれに協力して、これまで自分達を嚇しつけてゐた警官などを拐へて、意氣揚々とわが陸戦隊に連れて來る。またわが陸戦隊の手足となつて、斥候などの用事もしてくれたといふこと

である。更にある部隊は、駐屯してゐた部落から他へ移るとき、その村民は別れを惜み、もう少しゐてくれとなか／＼聽かない。

軍の命令であるから仕方がないと言つて聽かせると、それでは是非とも私共のお別れの志と思つて踊を見てくれといふ。この村では年一度の祭があと數月後にある筈であつたのを、彼等はこれを繰上げてわが陸戦隊に見せたいと、一ばん賑かな踊りで歡待したのである。さて翌日いよ／＼お別れとなると、彼等は泣いて別れを惜んだといふことである。

こんな別れがもしニューギニヤの或る地方で起つたとすれば大變である。その地方では親しい者が無理に別れるときには、よく相手の首を切るといふ。これは頭の中にはその人の魂が残つてゐるので、首を持つてをればいつまでも一緒にをれるといふ迷信から來たものださうであるが、わが陸戦隊は、セレベスであつたため、命拾ひしたわけである。しかし、ニューギニヤの全部がさうだ



といふわけではなし。

またこんな嬉しい話もある。ニューギニアの或る地方の王様は、オランダ政府の統治に楯つき、囚はれて十五年の刑に處せられ、アンボンの牢に入れられた。アンボン攻略と共にこの王様はわが陸戦隊に救ひ出されたのであるが、年を聴くと、多分五十ぐらゐるか、または七十ぐらゐるかと自分で言つてゐた。年中夏なので、あまりはつきりしてゐないのである。あと十五年も牢にをれば、一生陽の目も見ないで死ぬると思つてゐたのを急に救ひ出されたのですつかり感激して、自分の命の恩人である日本の軍隊のために何かお役に立ちたいと言つて、自分の領地に歸り、部下を糾合して、オランダ政府に對する反感を助長させるなどいろ／＼と工作をしてくれた。この工作が今度のわが海軍西部ニューギニア諸要地の無血攻略に大きな貢獻をしてゐることは申すまでもない。私共鐵定作戦の濟んだ占領地域のどこを歩いてても、武装や護衛なしで、何一つ危険

を感じることなく、日本の敵は敵性國にあつたのであつて、原住民はわれらの味方であるといふことをひし／＼と感ぜられるのを心から愉快に感じたのである。

これはわが潜水艦に救助された一ビルマ人の話であるが、彼は十數年もイギリス汽船の事務長として働き、イギリス人こそ自分達の親友だと忠實に仕へて來た。ところが今度の戦争で、シンガポール引揚のためスマトラに向つて航行中、日本の艦に撃沈された。そのときイギリス人は先を争つて救命艇に乗込み、ビルマ人の事務長が後始末をして飛乗らうとすると、船長はビストルを向けて乗艇を許さなかつたといふのである。今の今まで嬉々として仕へてゐたイギリス人が、如何に冷血であるかをはじめ知つたのである。その事務長はやがて日本の潜水艦に助けられ、敵と思ひ込んでゐた日本の軍隊から、却つて温い待遇を受け、感謝感激して日本軍に心からの協力を申出たといふことである。



これもわが特務艦が敵の捕虜を運んだときのことである。食事に味噌汁を出す、彼等はどうしても喉を通らない。ところが日本の兵隊さんがさもおいしさをうに食べてゐるのを見て、到頭敵の捕虜もこれを食べるやうになつた。艦内の焼つくやうな暑さに、彼等はすっかり疲勞し、お互ひに話をする元氣もない。この様子を見たわが一人の水兵は扇を三本土官室に持つて行き、「この扇を捕虜にやりたいと思ふのですが、許して下さい」と申出たのである。

士官がその理由を問ひ質すと、この水兵は「内地から来た慰問袋にあつた扇ですが、捕虜が苦んでゐるのを見ると可哀想ですから、せめてこれでも與へたいと思ふのであります」と答へたのである。士官もその話を聞き、胸に熱いものを感じ、水兵の申出を許した。この温い思ひやりに、捕虜達は涙を流して感謝したといふことである。

またバタビヤの話であるが、夥しい防空壕を日本軍が占領後、捕虜を使つ

て早速取毀してゐるのを見て、日本軍の自信のある強味にすつかり感激をし、その住民は日本軍の眞價をはじめ知つたといふことである。このやうな實例は、スマトラやジャバの知識階級にもよく見受けられたところであつて、原住民の若者達は早くも日本兵になりたいと志願者が殺倒してゐる有様である。スマトラ、ジャバにおいては、天長節に原住民の子供達は、立派に「君が代」を奉唱する。また私共が道を歩いてゐても、「おめでたう」とはつきり日本語で挨拶するくらゐである。或るとき面喰つたことがある。晩方のことであるが、子供が飛出して来て、さも懐しさうに、「お早やう」と言つて最敬礼をする。この子供達は「今晚は」といふもう一つの挨拶をまだ教つてゐないのであらうが、ほゝゑまじきことである。

また力強く感じたことは、ジャバにおいて「三亞運動」が青年層の中に起されてゐることである。「三亞運動」とは、アジアの光日本、アジアの樂土日本、



アジアの指導者日本をモットーとしたもので、天長節を期して發足したのであるが、これが一度叫ばれるや、民衆の心をびつたり拐へて根強い運動とならうとしてゐるのである。

現地にあつて華僑の下した地盤の根強さは、眼に立つもの、一つである。ジャバに住む華僑の例であるが、彼等は自分の子供に地理を教へる場合、「わが國ジャバは……」と教へ込んでゐることである。すなはちジャバは自分達の國だといふことを子供のときから教へ込むのである。かうしたところにも華僑發展の基礎を見ることが出来るやうに思ふ。一體民國人の生活力の旺盛であることは今更申すまでもないが、或るとき二時間漂流した敵兵、これはイギリス人、マレー人、民國人の三人であるが、その三人を捕虜にしたことがある。そのときイギリス人は起上る力はなく、マレー人は辛じて歩く程度であつたが、民國人は普通に働くだけの氣力を持つてゐたといふことである。民國人の

生活力の旺盛なこと、養澤をするものほど生活力がないことが、はつきり理解されるのである。私はこのやうないろ／＼な實例を見聞するについても、南方諸地方を指導するに當つては、特に聖人のやうな精神力、蠻人のやうな體力を必要とすることをつく／＼と考へさせられたのである。



### 美しき森と花のジャバ都市

さて、街について云ふならば、例へばバタビヤといふ町の如きは、森と花と水との町である。全體が別荘のやうな感じがした。落着いてゐるし、町幅が廣いし、その廣い兩端にある住宅が廣い庭の真ん中に、ぼつんと建つてゐるから、町を歩いてゐて、まるで公園の中を歩いてゐるやうな感じがする。

それが鬱蒼とした木に蔽はれてゐるから、あすこを上から飛んで見ると、ジャングルのやうな感じがする。いよく町に下りて來ると、その中に家があるが、流石ジャバの都で、非常にきれいな家が竝んでゐる。

暑さに困らないやうに冷房装置が發達してゐるし、贅澤な町だと思つた。その中を川や運河が流れてゐて、ともかく水が多い。

スラバヤは、それに比較すると木も少しいし、水も少しいし、やはり商賣の町といふ感じがする。

そこには、一番大きな軍港がある。その港は商港と軍港とごく接近してゐるが、その港の中と近所の海に沈んだ船が、今わかつてゐる数だけでも四十八隻ある。日本の占領した各港の沈没船の数は、これは夥しいものであらうが、その引上げ作業は既に着手されてゐる。中には浮び上らせたものもある。浮かした船が沈んでゐる間に附着した泥でよごれてゐる。この汚れをとるために毎日勤勞奉仕を申し出るインドネシアの原住民たちに掃除させてゐる。彼等は非常に喜んで掃除する。

何をお前たちに褒美にやらうかと言ふと、米を呉れと言ふ。そこで、彼等が一日働くと米を一升づつやることにしてゐる。これは〇錢に當る。ところが、何日かたつたあとに、掃除した連中がもう二錢金を呉れと言ひ出した。それから譯を聞くと、この泥が非常に汚なくて、身體が大變に汚れる。彼等の入るのは、町の中を通つてゐる水の流れの中に入るのであるが、それが泥色である。その水で洗つても駄目である。それで、ほんたうの水で



洗はなければならぬが、この水代が二錢かゝる。かういふわけである。それでそれだけやると、彼らは喜んで働く。しかし、實際はもう少し多くやつてゐるわけである。

ジャバのバンドンは、今度の占領地の中でおそらく一番よい所であらう。

第一、暑くない。あそこは山といふよりも高臺になつてゐて、街全體が高い所にある。七八百メートルもあらう。だから暑く感じない。全東印度の避暑地といふ感じがある。宿屋なども發達してゐるし、街もなかなか活潑に動いてゐる。實に快適な所である。世界に誇るキニーネ工場もこゝにある。向ふの造兵廠もある。それを現在ではこちらが引繼いでゐるわけである。物資も今度歩いた中で豊富であると思つたのはバンドンである。なんでもある。食糧なども豊富で、朝飯からすむぶん豊富なものを食はせる。果物は思ふがままだし、實に南方の樂園と云ふ感じであつた。

### 舞踊の島バリ

それからバリ島に向つたのであるが、こゝは、私は案外だと思つた。たしかチャツプリンが、上裸の女性たちの姿が美しいといふので非常に宣傳して、その宣傳が利いてアメリカのチャイナ・クリツバーがこゝへ寄るやうになつた程である。そんなことから非常に異國情緒的なことを喜ぶアメリカ人には受けがたい。しかし、私等が行つてみると、成程住民達は割合によい感じを持つてゐる。それは非常によく分る。しかし、チャツプリンが宣傳したやうな素晴らしい美人國でどうにもならんといふやうなところではない。

いはゆる一般のインドネシアの女性は胸部が非常に發達してをつて、それを出しつ放しにしてゐるわけだが、それは日本人にとつて別にどうといふことはない。

しかし、こゝで有名な踊りとかいふものは、いはゆるバリ島の踊りといふものから、他國



の人に観せるための踊りに變つてゐると思ふ。私たちが上陸したとき、沿道からバリの踊りを踊らせるために音楽がふんだんに流れてゐる。これだけは事實である。われ／＼の時は特別の場合だつたのかも知れないが、ともかくずつとバリ人が並んで、少し廣い町角毎に二十人くらゐ、少い時でも十人くらゐの者が音楽を奏してゐる。簡単な打楽器、及び管楽器で編成され、絃もあつたかも知れないが、とにかく管絃樂である。

これはきはめて單調な管絃樂であつたが、町角の木の蔭で絶えず奏でられてゐる。まるで町中音樂である。しかし、それはいま云つたやうに極めて單調であつて、奏でる樂器の種類は數が多いけれども、音樂そのものはまことに單調である。バリ島の踊りの中に出陣踊りといふものがある。これはなかく勇しいものであつた。しかし、こゝはもとポルトガル領だつたために、その踊りの名残りが今でも残つてゐるのである。

その踊りの一つを仔細に觀察すると、これは既に報道班員が報告してゐることと思ふが、二重の輪を造つて踊るのである。これは盆踊り式のものであると私は解釋するのである。外の輪が女で、内の輪が男である。音樂はアレグロなものであつて、内の男だけはそ

のアレグロに合はせる。外の女はそのアレグロの音樂の所々を取つて踊るやうなである。だから實に奇妙な踊りである。

内と外とテンポが違ふ。外の女の踊りは實に奇妙な踊りだと思つた。

私は今まであゝいふのを觀たことがない。體をくねらせて、殆ど同じ地位にゐて廻らない。男の方は盛んに廻る。女は足を靜に上げる。しかしそれは踵だけを上げる。さうして上體をくねらせて手を上げ下げする。手は片手どつちかが低い。さういふ踊りである。指先は、細い指先で、實に奇妙な動き方をする。時々男が踊りながらしやがむ。さうすると女もしやがむこともあり、しやがまないこともある。

男のしやがむのは、その前の女に對する愛の意志表示だらうと思ふ。それで同時に前にゐる女がしやがんでくれれば、その愛を受けたといふことになるのであらう。指先の微妙な動きはその前の準備行動だと思ふ。男が廻りながらいきなりしやがんでも、女に知らん顔をされてゐたら、満座の中で恥をかくことになるから、その前に野球の投手、捕手と同じやうにサインをするわけである。その時の女の答へが指の動きだと思ふ。そこで初めて



宜しいと思つた時に男がしやがむ。さうして彼等はその晩以後愛人として成立するわけであらうと思ふのである。

### クーバンの落下傘勇士

さて、次に向つたチモール島のクーバンは落下傘部隊の活躍で有名となつたところである。

我が海軍落下傘部隊の降下した場所は命令を受けて占領すべき飛行場から、だいぶ離れた。牧場のやうな所に降りたのである。

そこで、飛行場まで行くにはジャングルを越えて行かなければならないのであるが、その前に或る一つの町に入つた。その町でオランダ軍の守備兵に相當

な抵抗を受けたのである。とてもひどい抵抗であつて、我が方も損害を蒙つたが、しかし、落下傘部隊は、非常に勇敢に戦つて突破した。その中の或る勇士のごときは、ほかのものには目もくれないで、必ず戦車を奪ひ取るのだと初めから宣言してをつたさうである。それは三等水兵で、まだ若い男であつたが、強いでまた有名であつた。かう宣言しただけであつて彼は事實三臺の敵の戦車を一人でやつつけてゐる。いかに勇敢な水兵とは云へ、一人で何臺もの戦車をやることは容易なことではない。

ところがあの邊は熱帯だから熱いので戦車に天蓋がない。周囲から敵の弾が飛んで来た時だけ當らないやうに出来てゐるので、上は明いてゐる。そこで、ガン・キャリア（大砲を載せる車）といつてゐる。それを三臺やつつけて、その三臺目の時にやられて、惜しいことに遂に戦死したのである。さういつた美談がクーバンには幾つもある。陸戦隊の戦は陸軍と同じだから、個人的なさう



いふ美談も幾らも出るわけである。

さて、このチモール島のクーバンへ来て感じた事は、今はいくらか緩和されたであらうが、こゝは全く最前線の感じがあまりにもひし／＼と迫るのを覚えたのである。これまで見て参つた占領地には物資も豊富であり、鹵獲品も山と積まれてゐるのであるが、クーバンはこれとは似てもつかぬ別の天地である。

こゝは最前線であり、濠洲を足場とする敵も、アメリカからの補給を得て、活潑に反撃して来る。したがつて夜は完全な燈火管制が布かれ、こゝにある皇軍部隊は極めて緊張した生活をしてゐる。

飛行場の近くに兵舎があるが、こゝに寝泊りしてゐては敵空襲の場合間に合はぬとばかりに、兵隊は飛行場にテントを張り、いざといふときにはすぐさま戦闘機が飛出せるやうにしてゐるほどである。

私は勇士達の手柄話を聴きたいと思つて、或る晩テント村を訪れた。あたり

は鼻をつま／＼しても分らない眞の闇である。勇士達の元氣な聲は聴こえるが、顔さへ見えない。

私は話を聴き流すのは勿體ない。これを手帳に書残しておきたいと思つて、燈を用意して貰ひたいといふと、與へられたのは、螢の火ほどのものであつて、光は直徑十センチを照らすに過ぎず、掌の廣さが僅かに白く見えるだけであつた。私は勇士達が快活に、何の屈託もなく、落下傘降下するときや、敵ボーイング空襲の時の手柄話等してくれる間にも、敵襲といへばバツと飛出して行く氣合のこもつてゐるのを身近に感じて、深く胸を打たれたのである。クーバンは人口僅か四五百の村であるから、わが海陸の大部隊に對しては物資が不十分であつて、この部隊は漁撈班を作つて、非番のものが海に魚をとりに行き、これを鹽魚として食糧の不足を補つてゐるほどである。敵機來襲の下にあつて、生活の不自由なことは、他の占領地では見られないほどであつた。慰安もない



手紙も慰問袋も来ない。だが勇士達はすべて元氣旺盛で頼もしい限りであつた。

### 日本的なメナド

さて、アンボンの船着場にオランダ時代のビクトリヤといふ城がある。我が海軍部隊がそこを占領するときのことであつた。もう何百年か経つた古い城で恐らく中世紀のものであらう。中世紀までの先籠の丸弾を使つた大砲を備へてある。飛行場は港の向側にある。こゝを非常に僅かな陸戦隊で強襲したのであつた。敵も初め相當頑強に抵抗したので、かなり苦戦となり、某部隊長が戦死したほどである。しかし、それにも屈せず、たうとう占領した。そこで向ふが降参して大分大勢の捕虜が出来た。こちらは飛行場を直ぐ修理しなければならな

いので、その飛行場の補修のために〇〇〇名の軍夫をその場へ急行させた。これは勿論軍人でないから武器を持つてゐない。鎌や何かを持つてゐる。この人数を、わが陸戦隊の勇士と見誤つて、敵は白旗を掲げたのであつた。あとでそれと分ると捕虜は、「自分等は武器を持つた本當の陸戦隊が来たと思つて降参したけれども、鐵砲を持たないものが来たのなら降参するんぢやなかつた」と非常に残念がつて云つたさうである。

その次に飛んだマカッサルは良い所である。セレベスの首府で人口は九萬位だらう。こゝにゐてセレベスの全島を統治するわけである。

街は立派である。その岸壁のごときは、南洋の僻海にしてはあまりに立派な港湾設備ができてゐて、實は驚いた位である。一萬噸級の船が三隻位ずつと並べる岸壁がある。そんな港は南洋には珍しいことである。倉庫は多少破壊されてあるが、それにしても物が豊富だから良い。岸壁が長いし、それに匹敵する



倉庫がある。それを直しさをすれば直ぐに役立つから、今後の大東亞發展上非常に有要なものであらう。

大きな船をつける所と極く近い所を廻る小さな船をつける所と別になつてゐる。あの邊は颱風などは絶対に起らない所であつて、日本へやつて来る颱風の起る所よりもつと南である。波が立たないと決まつてゐる。護岸工事とかさういふ設備さへ大して要らないと思はれる。颱風等も起らないからあの邊の沿岸の航海は舷が低い小船でよいわけである。うねりも入つて來ない。波は終日静かである。時々あつても風がある時に起る小波位で、海上トラックには最適だと思ふ。

元來、セレベスは非常に細くて長い、動物のキリンみたいな恰好をしてゐる。飛行機の上から見ると起伏が多い。鐵道を敷いたら大變である。セレベスなどは海上トラックで沿岸をずつと廻つてそれで物を運ぶ。さうして急ぐ人の

旅行は飛行機を利用する。私はその上空を飛んでゐてさう思つた。あすこはいろくの物資が産出する。ニッケルが出るのもマカツサルの附近である。この島の北の方にメナドがある。そこにミナハサ州がある。これは祖先は日本人だと言つてゐる位であるから、他のインドネシアとまるで違ふ。顔を見ても體つきを見てもみな違ふ。

或る時、その郡長とか村長とかの娘さん達が、我々の食事の接待に來たことがある。落下傘部隊が下りたあの近所であるが、落下傘部隊の人がその土地の人に日本語の單語を教へてゐる。それをよく覚えてゐる。十人位來た娘の中で半分位は我々が見ても日本人だと思つた位である。日本人の中でも優れた容貌の方である。身體つきも吾々と同じである。日本語で挨拶する人がたくさんある。おめでたうとか日本萬歳とか言ふ。唯少し發音が變なところはあつた。

溫泉は出るし、落下傘部隊の降りたカカスの飛行場の邊は高いから涼しい。



涼しいから原住民が割に色が白いのかも知れない。

飛行場の直ぐ傍に湖水がある。これはちやうど日本の芦の湖のやうな感じがする。やはり高原地帯になつてゐて、静かなきれいな湖で、メナド富士がうつてゐる。

森が多くてその森の中にポツリ／＼家が建つてゐる。他の島では原住民の住居は非常に貧弱であるが、あそこだけは立派に家の形をなしてゐる。他の所では殆んど裸に近いけれども、ここだけは上着もズボンも着けてゐる。ネクタイも締めてゐる。尤も跣足ではあるが。

女はちやんと簡單服よりももう一つ進んだ夏の婦人服程度のもを着てゐる。日曜になると教會に出る。それを見ると、絹の靴下を穿いて、ハイヒールでハンドバックを持つて相當なものである。キリスト教の影響は相當受けてゐる。ジャバは殆ど回教徒が全部だといふのに較べると、こゝはキリスト教である。

日本の竹と言ふ言葉はやつぱり向ふでもタケである。父といふ言葉もチチである。日本語と同じである。

たゞ白と黒といふのが逆になつてゐて、シロといふのが黒で、クロといふのが白のことである。また男の名に何兵衛とか、女の名にお松お花等と云ふのが残つてゐる。

### 凄絶、コレヒドールの變貌

さて、最後にフィリッピンに戻るが、ダバオでは監禁された日本人が既に一萬八千人が釋放されて現業について活躍してゐた。こゝでは、戦火もよそにし



て平氣で日本の女性が浴衣を着て歩いてゐる。あの邊は野菜が非常によく出来る。固有のものがある上に、日本からもつて行つた種がみんなよく合ふらしい。なんでも日本の野菜がある。

地味が肥沃であるし、それに熱と光線とが強いから、非常に良いのであらう。たゞ少し大味になるのはこれはやむを得ない。將來はあの邊での野菜供給地になると思ふ。

軍隊の自給自足の上に非常に大きな役割を演ずると思ふ。タバオの麻は船の網になる。今これが世界で非常に缺乏してゐるものである。それが一番立派な網であつて、輕くて水の上に浮く。水の上で作業する時に、水の上に浮いてゐることは非常に作業が樂である。普通の麻だと沈んでしまふから非常に作業が難しくなる。強くて輕いといふのがマニラ麻の非常に良いところである。これを今後どん／＼造つてゆくことが必要であらう。

その仕事がいまや緒についてゐるのを知つたのである。

日本人の店で多少閉つてゐるものもあるし華僑の家で閉めたものもあるが、大體に於て回復してゐる。軍事施設が少ないから破壊は少なかつた。軍事施設のない所は日本軍は殆ど破壊しない。たゞ彼等が自分でやつたものだけであるから、自分でやるにはさう民家を焼拂ふことも出来ないし、あすこの破壊はさう大したことはなかつた。

ところが、キャビテ軍港に入つてみると、そこは非常によく計畫して壊してある。各工場がものすごく破壊されてゐるし、焼かれてゐる。これは焦土戰術以外に我の正確な攻撃も随分あり、これは軍港であるから我が海軍の爆撃によつて非常にやられてゐる筈である。

ちよつと見たところでは手のつけやうがないと思ふ位であるが、實際やつてゐる人達は着々研究を進めて、此處と彼處はかうやるのだと言つて復興の緒に



ついでをるのは、頼もしい限りである。

さて、わが海陸の精銳の猛攻のために遂に降伏したコレヒドール要塞であるが、私は、その島については、以前から關心を持たされてゐる。私が大尉の頃見たコレヒドールといふのは實に美しい島であつた。緑の濃い中に所々うつくしく咲く花が見え、又新しい自動車<sup>サブ</sup>が滑るやうに走つてをたりして、ほんたうに繪のやうに美しい島であつたが、こんど四月二十四日にあの上を飛んでサイゴンに行く時、下を見ると、所々木の枯れたやうな所があり、なにがなしに落着かない島になつてゐた。

五月五日に上陸作戦が行はれ、七日に占領されたのであるが、私共は十一日にこの島に上つたのである。近づく、あの緑だつた島が全然赤裸である。枝といふ枝は皆爆弾や砲弾で打落されて、葉は一枚もない。ただ木の幹だけが砲弾で焼けたり燻つたりしてゐる。あらゆる施設が殆んどあとかたもなくなつて

ゐる。地下を通つてゐた電車が、山の低い所では地上に出てゐたのであるが、それが地上に現はれたまゝ、惨めな形になつて、たゞ骨だけ残つてゐる。なんとなく人臭い。

彼等は山に横穴を掘つて、これが全部で五つ、いはゆる地下要塞の一部であるが、こゝに收容されてゐた。實は七日に降伏を申出たのであるが、その前日、一部の部隊ではあるが、そこに敵が逆襲して来て、日本側にも多少の損傷者を出してゐる。

何回目かの逆襲の時、彼等は軍使を立て、日本軍に降伏を勸告して來たのである。これから考へると、アメリカ人といふのは、こつちが少し弱味を見せると、どこまでしぶとくなるか分らない。世界一弱いといふアメリカの陸軍が、強い日本軍に降伏を勸告する、かういふ圖々しい氣持になる。それから數時間後にはコレヒドール全部が降伏したのであるが、日本側ではこれを許さず、全



フィリッピン軍の降伏する時初めて許す、それまでは人質になつてをれといふことになつた。折角安心の出来る捕虜にならうと思つてやつて来たのに、人質といふ、まことに彼等としては工合の悪いことになつたわけである。

彼等は全部そのトンネルの中に追込まれて、その入口は鎖された。かうして四日間戦争をしてゐる時よりもつと厭な時間を過した、と彼等は言つてをつたが、遂に十二日の朝、全部のフィリッピンの敵軍が降伏したのである。私共が行つたのは、その降伏を許された最初の日で、彼等はいよゝこんどはほんたうの捕虜になれたので非常に喜んで、その一部の者は、海岸で泳いでもよいといふ許可があつたので、海岸に出て大騒ぎをしてゐるのを私共は見ただのである。仁慈の皇軍である。

私は、あんなに鳥の色が全部變つてしまふほどの爆撃、砲撃といふのは容易なことではないと思つた。前大戦の西部戦線の跡を観た時も、やはり立木の枝

が折れて、幹に弾の痕が残つてゐたのであるが、それよりコレヒドールの方がずつとひどいと思つた。あのコレヒドールの状況といふものは、悲惨といふ言葉を越えたものである。これ程に攻撃を加へた皇軍の強さもさることながら、私はこの攻撃にあれまで耐へたアメリカ人も相當なものであるといふことを感じたのである。私はアメリカ人といふのは、他の所では皆輕蔑してをつたが、コレヒドールでは少しばかり感心した。日本人でも容易ではないであらう。あれだけやられてあゝいふ状況の下に尙ほ戦つたその抵抗力は相當なものであると感心したわけである。ウエンライト大將の如きは、ほんたうに向ふの英雄であると思ふ。あれ以前までマニラを守つてゐた艦隊の長官であるハート大將などは、日本軍が行く前に逃げてしまつて、遂に最後まで姿を現はさず、しかもそれが最高勳章を貰つてゐるのであるが、さういふのに較べれば、コレヒドールを最後まで守つたウエンライト大將は實によく戦つたと思ふ。



### 愉しき俘虜生活

現地でみた私のアメリカ俘虜に對する感じは、彼等はちやうど六大學のリーグ戦で戦つて負けた、そのあとの選手のやうな気持ちのやうである。

俺は精一杯やつたのだ、さうして俺の方は負けたのだ、だから、悔いるところはないのだ、さういつた感じで、別に何といふこともない。實にサツパリしたものだ。笑ひ興じてゐる。その間恥もなければ悔もない。まづたくリーグ戦で負けた選手といつた感じであつた。それほど彼等は戦争をスポーツ化して見る性格を持つてゐる。スポーツの値打はスリルにあると彼らは始終言つてゐるしそれを最も大きく感ずるのは戦争である。従つて戦争と云ふスポーツで自分は精いつばい戦つたが負けたといふ気持ちに見えるのである。日本人みためにリーグ戦で負けたつて泣きはしない。ただ少し残念なのは、懸賞金が貰へな

つたことであらう。

彼等の妻子に戀々たる気持ちも豫想以上である。どこまでも、彼等は、自分本位の個人主義である。しかし、戀々たる反面にはアメリカにゐる家族が聞いたら心配するやうな悪徳を平気でやつてゐたものもあつた。かう云ふ風紀を紊した捕虜は處罰されるのである。

イギリス人の捕虜の方は、例へば或る時、ミルクの罐が十五個なくなつた。その管理をしてをつた日本の水兵がちやうど英語の出来る男で、「お前たちジェントルマンぢやないか。ジェントルマンともあらう者が、ミルクの罐を管理者である俺の知らぬ間になくす法はないではないか」とたしなめた。すると、その次の朝十三個返つて來たといふ話である。だが二つだけ返らなかつた。二つだけは取つてすぐ飲んでしまつたらしい。しかし、捕虜になつても、ジェントルマンと言はれると、それが利くらしい。それがさすがにイギリス人氣質だらうと思ふ。

オランダ人はやはり一番下等といふか、低いのである。私にはさういふふうには思はれる。



全體を總括して捕虜たちに感ずることは、自分の生命が安全だらうかといふことを心配してゐること、待遇をよくして貰ひたいと思つてゐること、いつ歸れるかといふ問題これだけは例外なしのやうである。

三井のアメリカをつた人に、その同じ社で働いてをつたアメリカ人がかういふことを言つたことがある。「戦争になることは必定であらう。とても避けられまい。だから自分は覺悟してゐる。そこで貴下の名刺を一枚くれなにか。さうしてその名刺に、この男は日本の三井の王國にをつて永年よく働いた、日本に對してよい感じをもつて働いた、かう書いてくれ」と頼んだ。どうするのだといつて訊いて見ると、「戦争になれば、俺は捕虜になつて日本に行くだらう。俺には兵役義務があるからだ。その時三井王國に忠實に仕へたことがわかれば、俺は相當よい待遇を受けられるだらう。だから、お前の名刺は非常に値打があるのだ」かう言つたさうである。その一言から見ても、笑へないアメリカ人氣質が出てゐると思ふ。三井王國といふのは日本より偉いと思つてゐる。彼らの頭には金があれば偉いのだから、それに勤めたのだから相當の待遇を受けると思つてゐるわけである。

る。

そのよい待遇を受けることが、彼らにとつては大きな問題となるのである。従つて、日本人に睨まれて、彼奴は嫌な奴だと思はれては、待遇が悪くなる。そこで、どうかして日本に好意を持つてゐることを示したい。これは大體において捕虜全體を通じた氣持ちぢやないかと思ふ。さうすると、働くのでも、態度でも、日本人に對してだけはよくしたはうが得だといふことになる。だから、働くのを嫌がつてをらぬ。よく働いてゐる。日本人を見さへすれば氣をつけをしたり、丁寧に敬禮をしたり、さういふことをうまくやつてゐる。

これは他の所でもよく分ることであるが、彼等は仕事をさせて貰へば命が安全だといふ考へを持つてゐる。どの捕虜でも殆ど例外なしに、日本人に殺されるのぢやないかといふことを非常に氣にしてゐたやうである。これは日本が國際俘虜條約に入つてをらんからであらうと思ふ。彼等は世界の國際條約など何も知つてゐないのに、俘虜條約だけはよく知つてゐるのである。だから働かさずじつとして置かれると、彼等は不安で堪らない。とこ



ろが仕事をさせると、これで自分は日本に必要な人間になつたのだからバツサリやるやうなことはあるまいといふので、一安心する。さうして喜んで働くのである。

捕虜の云ふことをきいてみると、彼等は自分の命がどうなるか、無事に自分の國に歸へれるかどうかといふことを非常に心配して、それが彼等に取つて一番大きい問題である。或る時日本の士官が、今度の戦争は百年戦争だと言つたところが、彼等は、それでは自分達は百年捕虜でゐなければならんのかといつて蒼くなつたさうである。

彼等は、なんとかして捕虜生活を樂しまうといふことになる。彼等の不平はそこにあつたと思ふ。折角生活を樂しまうと思ふのに自分の女房も寄越してくれない、愛人にも會へない。折角御馳走を食はうと思つてをつたのがそれも出来ない、涼しい所で快適な生活をしようと思つてゐたのに暑苦しい所にゐなければならん。かういふ不平があつた様だ。併し最近では、日本人の眞意もわかり、不平も殆んどきかれなくなつた。こゝに一つ面白い話がある。

メナドには約七百人くらゐの捕虜がゐる。これは捕虜といつても、戦争をしない、いはゆる非戦闘員の收容された者もゐるのであるが、これがたつた一人の我が海軍の三等兵曹によつて管理せられてゐる。「山田さん」と彼等からも愛稱される三等兵曹のもとに二十人くらゐのインドネシア人の守衛がゐて、これが皆革の鞭を持つてゐる。さうして「山田さん」がビーツと笛を吹いて日本語で號令を掛けると、オランダ人の捕虜が一齊に行動を起す。あまり見事なので、私は聞いてみた。すると、なにもむづかしいことぢやないので、守衛達が、自分等が今まで水牛のやうに働かされ、蹴られたりして來たオランダ人が殴れるといふので、何か失敗すればいゝがと思つて一生懸命見てゐる。オランダ人も、やはり殴られたくはない、痛くない方がよいから一生懸命に働く、かういふわけである。監視も、極めて簡単な方法で監視してゐるが、何も危険は感じない。その山田さんの如きは、武装も何もしてゐないのであるが、それで結構やつて行けるので、最近では文句も何も言はないで、よく言ふことを聞きますと言つてをつた。この捕虜をよく見ると、立派な髯を生やした人もゐる。市長さん、州知事、或は今までに試験管しか持つたことがないや



うな、むやみに厚い近眼鏡をかけたお爺さんもゐる。一流の紳士が集つてゐる様だ、さういふ連中が三等下士の命令によつて働いて、住民の鞭に見守られながら行動してゐる。

そこをみても戦争といふものは石に嘯りついても勝たなければならぬものだと思ふ。さうして彼等は何をしてゐるかといふと、年寄達は大したことは出来ないで、立つたまゝで土に届くやうな長柄の鋏を興へ、これで立つたまゝ耕してゐる。この耕された所には絲の長い棉を植ゑてゐるので、やがてはエジプト棉より少し短い世界で二番目くらゐの棉が出来る見込である。かうして日本のために働いてゐる爺さん達は、今まで日本に何も賣らなかつて頭張つてをつた人間だから非常に愉快である。

かういふ皮肉な話はたくさんあるのであつて、バンドンに世界のキニーネの九六パーセントを産する会社があるが、その支配人は、日蘭會商で日本にはキニーネは一グラムも賣らなかつて頭張つてゐた男である。蘭印軍が降伏して、この会社を接收に行つたのが日本の陸軍参謀であるが、これは日蘭會商の随員として行つた人で、その支配人の顔を知つてゐる。

この参謀に對してその支配人が、

「こんどは日本は何グラムのキニーネをお望みですか」と圖々しくも言つたさうである。わが参謀將校は、たまりかねて、

「こんどは一グラムも要らん」といつた。

しかし、直ちに、一グラムも賣らなかつたキニーネは、我が管理に入つたのである。



## 六、占領地域の資源と建設戦

### 石油の復興状況

日本側の占領地の状況は、既に破壊戦が終り、いよいよ建設戦が盛んに行はれようとしてゐるのである。その中で最も顯著なものは石油である。石油の設備で破壊されたものは、バレンバン、バリックババンである。

かういふ所ではどん／＼修理されてをつて、既に船で積出した所もあるくらいである。

その一つであるホルネオのバリックババン、タラカン、サンガサンガ、さう

いふ所を一括して海軍が主としてやつてゐるのである。

バレンバンは主として陸軍がやつてゐる。私は両方を見て参つたのであるが、バレンバンは割合に残つてゐて、既に働いてゐるのである。

そこへ行つて面白く感ずることは、イギリス、オランダ系の会社と、アメリカ系の会社とが、ムシ河の支流が通つてゐるその両側にある。つまり、イギリス及びオランダ側とアメリカ側が河を挟んで二つに分れてゐる。

ところが、アメリカは割合に思ひ切りがよい。見事に爆破してゐる。オランダ側はそこへゆくとやゝ客臭い。最後まで、もしかしたら、日本軍が来なかつたら、早く壊したら損だと思つてか、その日まで働かしてゐる。かういふ所に二つの国民性がよく現はれてゐると思ふ。

アメリカ側は早く壊してしまつたが、オランダ側は日本軍が来るまでお茶を飲んでをつた。占領當時の部隊長の話では事務所に入つてみると、社の幹部が



日本軍の急襲を受けて、お茶を飲みかけて少し入つてゐるもの、空になつてゐるもの、いつばい入つてゐるもの等、そのまゝ残つてゐたそうである。

バリックババンでもオランダ側は何ヶ月か前からいかにしてうまく壊すかといふことを詳しく研究して、最後まで残しておかうといふ態度だつたから、日本軍に急襲されて、逃げる時に、電氣のスイッチを入れたわけだが、必ずしも電線がうまく作用しないで火薬が爆発してゐないといふものが幾つもある。そのためにバリックババンもだいぶ残つてゐる。初めに評判されたほどひどく壊れてゐない。タンクだけでも〇〇萬トン位は残つてゐるだらう。それは彼らの計畫はよかつたが、破壊の實施が悪かつたためである。

例へば、發表になつたやうに、陸軍の坂口兵團がバリックババンに上陸したのであるが、タンクの外側に「坂口部隊爆破装置撤去」とタンクに書残してゐる。火薬や何かみんな入つてゐた。一番先に乗込んで来た坂口兵團がそれを外

したわけであるが、これはずるぶん危険な作業だつたらうと思ふ。

さういふタンクが残つて油も入つてゐる。直ぐ間に合ふ。

さらに面白いと思つたことは、機械工場がちゃんと完全な状態で残つてゐることである。他のものは随分壊されてゐるが、機械工場が残つてゐるから、すぐ修理ができる。修理に大事なものがみんな残つてゐる。

また官舎住宅等がすつかり残つてゐる。その二つを考へ合せて見ると、やがて自分たちは歸つて来るのだといふ下心のもとにさういふものを残したのか、或いは壊す積りであつたのが、電線がうまく行かなくて駄目になつたのか、そのいづれかはわからぬが、見様によつては、緒戦においてこそアメリカは日本に負けて手を出さないでゐるが、今に挽回して来て、この邊の占領も自分たちの手に戻せるのだ、といふやうな下心があつたのではないかと思ひつゝ、私は見てきた。



石油の問題といふよりは、これは國民の心構へだと思ふ。

もしさういふ下心を持つてゐるとすれば、これは大いに警戒を要するのである。

われ／＼が今の勝戦さをもつと徹底的に續けて行かないと、さういふ彼等の下心が實現するわけであるから、日本としてよほど警戒しなければならぬと思つたのである。

さういふふうにして、回復の仕方は兩方とも非常に進んでゐる。あの調子でゆくと、これは案外早いぞといふ感じを受けた。また係の人たちの説明を聞いても、現實に早いらしい。初め壊れた状況を見た時には、これは困つたと思つたが、その後實際やつて見ると、機械工場は動かせるし、オランダの關係してゐた技師連中が非戦闘員として收容された中にゐて、これが案外喜んで協力してゐる。

これは不思議な現象で、われ／＼にはよくその心理はわからぬが、恐らく日本といふ國が自分たちをどう待遇するかといふことがよくわからないらしい。日本の心が判らない。随つて、收容した敵國人をいかに扱ふかといふ見當がつかない。そこで彼等の考へることは、日本の要求するところに應じて働いて、日本に對して惡意を持つてゐない、むしろ協力してやるのだといふ態度によつて、日本から受ける待遇をよくして貰はうといふ下心があるのではないかと思はれる。これは私の想像であるが、さう感じたのである。そうとでも考へなければ敵國に協力する心持は分らない。

彼等は案外よい感じで日本のために復舊工事に働いてゐる。

もしそれらの援助がなければ、一體この機械はどうして動くのだらうといふ風な機械もあるだらうと思ふ。その上に幸ひなことはさういふ所に働いてをつたインドネシアの熟練工が、殆んど全部歸つて來て働いてくれる。朝晩それら



の者が出勤退所する時間は非常に混雑してゐる状態である。そこで、回復も案外早いといふのが實情である。今から〇年とたないうちに戦前の状態に殆んど戻るだらう、かういふことを現地の人と言つてゐる。もうどちらか油を出し得る状態といふか、殊に前から蓄積されてをつて爆破されないで残つてゐるものがあり、それらを利用してゐる間に、多少のものは出てくるし、それがなくなる頃にはさらに次のものが出て來ると思ふ。

### 食糧の現地自給

かうなれば、現地で間に合はないものは幾らもないやうである。大體日本も現地ですべて賄はうといふことを目標としてゐる。どうしても間に合はなければ、新しくこゝで作らなければならぬ。

例へば、クーバンにゆくと、チモールの野菜が足りないから作るのだといつて、或る所でそれをやつてもう立派に成功してゐる。それを船であの大東亞海の中を各島にお互ひに運べばよい。

それで自給自足が出来る。その他のものも同様にやればよい。今後あの地域のためにいろ／＼日本から材料を出せばよいものもあるし、或は技術者だけゆ



けば向ふでやれるものもある。

結局、占領地域方面の足りないものは、日本から向ふに道具を持つていつて向ふで作ることが出来ると思ふ。人間は非常に豊富、物も豊富、たゞそれを加工するのにうまい設備が出来てゐないだけであるから、それを優れた日本の裝備、技術を持つて行けば出来ると思ふ。

石油の問題も、もうあの中で賄ふ方向にどん／＼進んでゐる。艦隊でもさうだ。今いろ／＼の作戦をやつてゐるが、わざ／＼日本まで歸つて来て消耗品を積まないでも、あそこにある物資、資源で間に合せることが出来る様にならう。

今までオランダの人間は、日本に出す油はジャバノールといふ名前をつけて、揮發油を抜いてゐた。これは實に狡いやり方である。だから、今まで、蘭印の油は揮發油分がないといふ悪評があつたが、さうではない。わざわざ揮發油を抜いて作つたのである。今後は抜かないものが出て来るから東インドでは

よい油が出るわけである。

それからキニーネであるが、これはジャバから世界の九割が出る。それをバンドンで精製してゐることは、前にも述べた通りである。

嘗ては、一グラムも日本には賣らないと云はれたバンドンのキニーネが今では、すでに、我が管理になつて、大いに役立つてゐる。アメリカなどは買込が多少あるであらうが、アメリカの領土或は植民地で、アメリカ人が仕事をしてゐる所でマラリヤ熱の流行りさうな所は、もう一切働さが出来なくなつてゐる。これは戦争の一つの面白い方法だと思ふ。キニーネがなければやつて行けないから、やがてそこを抛棄しなければならぬ状態になる。或は何か代用品みたいなものをやつてゐるかも知れぬが、すぐうまく行くとは思はれない。彼等の領土が縮められることになる譯だ。



### キニーネ、錫、資源の處理

錫——これはペナンでやつてゐる。いままではイギリスが一手に經營して本國に持つて行つてゐたが、今度はすつかり押へられてしまつたから、ロンドンの錫株といふものは無慘にも暴落してしまつた。我が方では從來の錫鑛の他にさらに錫鑛の發見されたものもあるし、世界の錫の大部分を押へたことになる従つて、ゴム、ボーキサイト資源その他を含めて、日本としては非常に有利な立場に入つた譯である。

かくのごとく、一般に言つて南洋の經濟建設は以外に早く進んでゐると思ふ。今までは南方大寶庫といふものは「日本用」といふ看板だけであつたの

が、もう調査、整理、運び出し、さういふ目鼻がつき出したといふわけである。一部はもう日本のものに變つてゐると言へると思ふ。しかし、これだけでもう戦争はしなくてもよいのだと考へるのはまだく早過ぎる。そこは充分戒心しなければならんところだと思ふ。

しかし、破壊のあとの建設戦が迅速に進んでゐるのは、内地で想像する以上である。敵が焦土戰術をやつたことは前述の通りであり、相當徹底してゐるが、道路、橋、港灣施設、或は鐵道、飛行場、油田など、これが復舊は割合迅速に進捗してゐる。現在の話では、あと〇年とは經たぬうちに開戦前とほゞ同程度に復舊出来るであらうとのことである。

前に述べた石油の他に砂糖、米などの農産物も、今年は豊作であり、石油をはじめニッケル、錫などもだん／＼産出を見、その大部分は既に内地へ送り得るやうな狀況にあり、心配されてゐたコブラ或はゴムの生産過剰の問題も、新



しい方面に利用の光明が見えはじめ、これまた喜ばしいことである。南方において棉の有望であることも確認され、また未開地に有望な油田が発見され、とにかく戦争に強い日本人は、また経済建設にも卓越した力量を持つてゐることを現地の経済建設戦においてはつきり証明してゐることは、頼もしい限りと申さねばならぬ。

さて、南洋は年中夏のところである。ジャバの田舎を歩いて見ると、苗代田があるかと思ふと、隣の田では田植があり、その次の田では稲がふさ／＼と稔つてゐる。また刈入が行はれてゐるといふ状況であつて、朝田植をしてゐた農家が、その日の午後は刈入をやる事實さへあるのである。日本では冬揚げる風をこゝでは夏揚げて居り、その傍の地では子供が水浴をしてゐる。

また道端ではカンナの花と、日本では秋に咲く葉鶏頭とが同時に妍を競ふ有様で、内地における四季のものが一時に花を咲かせ、壓政から解放された原住

民の喜びを物語つてゐるやうな平和な光景を現出してゐる。都會においても、農村にあつても、わが東亞の平和を確立せんとする建設戦に率先協力してゐる原住民の姿に、大東亞新秩序の曙光が見える氣がするのである。

新秩序を現住民に解らせるには、オランダ領であつた所では、オランダ人を驅逐するのだと言つた方がよくわかる。彼等をおさへてゐたオランダ人を全部追ひ出す。さう言へば彼等にはびんと来る。

彼等は到るところで日本人を心から歓迎するのであるが、その一つの理由に、私はかういふことがあると思ふ。それは日本人が来てから税金が少いといふことである。今までオランダ人時代に人頭税等のひどい税を取られてゐた。それがなくなつた。これは彼等に非常に利いてゐるのである。

日本から行つて南方の仕事に携はらうと思ふ人達は、さきにも述べたやうに聖人の如き精神力と、蠻人の如き體力が必要である。これがモットーだと思ふ。



## 七、海軍精神の發揮と今後の作戦

### 一 求敵必滅の海軍精神

開戦以來の赫々たる戦果は、果して何によつて得られたかといふと、まづ第一に擧げなければならぬのは、日本海海戦以來、勝つて兜の緒を引締めて、研鑽を續け訓練を重ねて來た、上は元帥大將から、下は一水兵に至る、全海軍先輩の賜物であることである。

訓練による必勝の信念と、必勝の信念に立脚する敵撃滅の精神は、海軍の傳統であるが、ワシントン會議によつて五五三の劣勢比率を押しつけられて以來

兵器の改善に、訓練の徹底に、兵術の研究に、海軍の苦心と努力は全面的にこれに傾倒せられ、海軍傳統の精神は火と燃え立つたのである。殊に當時より米英合作の傾向が大きく、十對三を覺悟しなければならぬ實情にあつたので、これが對策として量より質、すなはち兵器の優秀性が要求されたのは當然である。同程度の兵器をもつてしては、量において格段の差ある相手に對抗出來ないからである。

わが兵器の優秀であることは、今次戦争において、遺憾なく立證された。帝國海軍獨特の新兵器も採用されてゐるのであつて、ハワイの眞珠灣奥深く突入して、敵を戦慄せしめた特殊潜航艇の如き、そのよい例である。

兵器の改善或は新工夫とともに、血のにじむ兵術研究が續けられたことも、忘れてはならぬのである。ハワイにおいて、マレー沖において、さては大東亞海、インド洋において、或は珊瑚海にミッドウエー、近くはソロモン群島方面



において、意表を衝くわが作戦に、敵が敢へなく撃滅せられ、或は敗退した所以については實にわが兵術の卓越をまづ最初に挙げなければならぬのである。ところで、優秀な兵器にしても、卓越した兵術にしても、その成果を發揮するために必要なものは訓練の徹底である。

東郷元帥の遺された教訓に、

「一發必中の砲一門は、百發一中の砲百門に匹敵する」といふお言葉がある。

この教訓こそわが海軍訓練の目標であつた。永年に互るこの訓練が、どうして實を結ばずにをられやう。しかしかゝる訓練も、これが實施にあたり、大精神力の躍動なしには、その成果は絶対に期待出来ない。随つて各海戦におけるわが海軍の勝利は、旺盛なる海軍精神力に擧つた凱歌ともいへよう。

海軍の傳統である「敵を倒すまでは死なぬ」といふ精神は「見敵必滅」といふ信念となり、更に敵を求めて滅すところの「求敵必滅」の精神にまで進展

し、この信念によつて弱勢をもつて有力な敵と遭遇した場合にも、敢然これに挑みかゝるのである。これに反し、敵國海軍においては自分が有勢なときのみ戦ひ、劣勢なときは、戦ひを避けるのを常としてゐるのである。

こんな實例がある。

わが海軍航空部隊の一戦闘機は、命ぜられた敵情偵察の任務を終へたのであるが、敵飛行場にある十數機の敵機をみすゞ残しておくのは残念だと、豪膽にも単機敵飛行場に降下、低空飛行でもつて敵機十三機を銃撃大破させ、悠々上昇歸途についた。

不幸敵弾のため右肩を射抜かれたが、勇を鼓して操縦、漸くわが陸軍飛行場を發見した。しかし右手が使へぬため着陸の車輪を出すことが出来ぬので、機體そのものをもつて着陸したが、そのときは殆んど人事不省であつた。

漸く意識を回復するや、「偵察の報告を海軍部隊に傳へて下さい」と言ひ終



り、かすかに「天皇陛下萬歳」を唱へ、息を引取つたかに見えた。ところがこの勇士は、わがて身を起して再び「天皇陛下萬歳」を唱へ、遂に最後の満足さうな息を引取つたのである。

バリ島の海戦において、わが驅逐艦二隻が、巡洋艦を加へたわれに數倍する敵艦隊に遭遇するや、敢然その有勢な敵の中に突入、敵に殲滅的打撃を與へたのもそのよい例である。

またスラバヤおよびバタビヤ沖海戦において、舷々相摩す激闘が演ぜられたが、不幸一隻のわが驅逐艦は損傷を受けた。速力が落ちて來る。遂に漂流する。傷つき且つ漂ひながらも、なほ敵驅逐艦一隻を撃沈し、他の一隻に大損害を與へ、敵の輕巡を逃走せしめた。

その後その驅逐艦は、わが無疵の僚艦とともに大膽にも當時敵がなほ蟠居してゐたジャバ島の沖に錨を下し、こゝで悠々修理をし、途中更に一合戦をした

後、味方の基地に歸つたのである。この豪膽さ、この沈着さ、敵はその無敵振りに全く膽を潰したことと思ふ。

またスラバヤ、バタビヤ沖海戦に次いで、ジャバ島クラカン北方洋上で、イギリスの甲巡エクゼターを撃沈したときのことである。白晝敵の甲巡に攻撃を加へんとするにあたり、わが驅逐艦の艦長がまづ最初に下した號令は、

「飯を食へ」

といふのであつた。

現在のわが艦の位置から考へて、敵にぶつつかるのは正午頃になる。今のうちに緩つくり晝食を攝り、腹拵へをさせておきたいと艦長が考へたからである。やがて敵艦は姿を現はす。味方は驅逐艦、敵は驅逐艦を從へたイギリスが最新鋭を誇る巡洋艦である。

だがわが驅逐艦はびくともしない。僚艦ともに僅か二隻の驅逐艦でもつて、



猛然敵に挑みかゝり、これをジャバ沖海底深く叩き込み、盟邦ドイツの豆戦艦  
シユベール號の仇を討つたのである。

このやうにわが旺盛なる攻撃精神は到る處に發揮され、スラバヤ沖、バタビ  
ヤ沖の海戦には、米英蘭濠の巡洋艦五隻をはじめとし、各種の艦艇二十三隻を  
撃滅してゐる。この戦果に對しわが方の損害掃海艇一隻沈没と驅逐艦一隻小破  
といふ輕微なものであつて、敵側の常識では到底割出すことの出来ない數であ  
る。一月二十七日、エンダウ沖で行はれた、敵味方驅逐艦二對二の激戦から數  
へると、三月一日に終つたバタビヤ沖海戦まで約一ヶ月の間に、大東亞海方面  
の敵の艦艇を撃沈または撃破した數は、實に四十七隻に上つてゐる。この數字  
の中には商船または輸送船などのいはゆる船舶は、一隻も含まれてゐない。  
更に人の和が戦力發揮に大きな影響を持つものであることを見通してはなら  
ないのである。こんな例がある。

開戦後間もなく、わが或る驅逐艦が不幸南方洋上において沈没したときのこ  
とである。艦影惜しくも波間に消えた後、一人の水兵が泳いでゐると、すぐ前  
方に救助袋を持つた一士官の姿を認めた。

「大丈夫ですか」

と水兵が聲をかけると、

「お前こそ、大丈夫か。怪我はないか」

と水兵を氣遣ふのである。

「私は元氣です、大丈夫です」

と水兵は答へながら、勇んで近づいて見ると、その士官は重傷らしく相當疲  
れてゐる様子である。

ハツとした水兵は、

「しかりして下さい、私につかまつて下さい」と大聲で呼びながら、漸く手が



届くところまで近づいたが、士官は、

「僕は火傷がひどく長くは泳げん、救命袋は無駄だからお前にやらう、あせらないで救助を待て……」

とわが身の苦痛を忘れて部下をいたはり、救命袋を水兵に與へ、間もなく士官は力盡きて水中に沈み、やがてその水兵は僚艦に救けられたのである。

またこんな話を聽いて胸を打たれたのである。

或る驅逐艦が激戦の後、最寄の基地に入つたときのことである。

普通戦闘中仆れた戦友の遺骸は、艦内に假りに安置して、艦の入港と共に茶毘に附するのであつて、いよ／＼甲板で最後の袂別を行ふことになつた。このとき艦長は遺骸の一つ／＼に跪き、その胸をさすり頭を撫でその手を握つて、生ける人に物を言ふやうに奮戦の勞を稿ひ、冥福を心から祈つたのである。この情景に全艦肅として聲なく、涙のうちに面を上げる者もなかつたといふ。

ふ。最後まで上官を慕ふ部下、最後まで部下を勞る上官、この士官にしてこの水兵あり、帝國海軍が何故に強いかは、その例からしても解つて戴けると思ふ。

わが海軍の戦果を齎らした要素としては、右に述べた點が數へられるのであるが、これらの要素がその機能を最高度に發揮し、顯現することの出来るのは、實に大御稜威を戴いてゐるからこそである。

一天萬乘の大君を戴き、大君のために命も魂も捧げて御奉公出来るのは、世界廣しと雖もわれ／＼日本國民にだけ與へられた光榮であり名譽であると思ふと、洵にわが國の尊さに感激を覺えるのである。



## 海軍精神の探究

150

我が海軍獨特の「海軍魂」乃至「海軍精神」をここで少し考へてみたい。新しき精神力といふものは物質と精神との、心と物の一緒になつたところから生れて来る。とにかく、物心一如までゆく建前である。その建前で以て如實に海軍のやつてゐる問題は、科學力と精神力との一致といふことにある。

海軍にも徴兵といふことはある。ところが海軍の仕事は非常に科學性が高いために徴兵の年限の三年や四年では科學性の高い兵隊になれない。そこで徴兵が三年経つと、そこから先は志願にする。それからほんたうに科學性の高いところはずつと上つて行つて、五年なり七年なり経つて初めて、近代的な新しい

勇氣のある軍人が出来て来る。志願兵になる前の徴兵部門では、まだ科學性の高い訓練は出来ない。

そこで、たとへばかういふことを言ふ人がある。上海で以て戦つた時の海軍特別陸戦隊は非常に勇敢だつた。だから海岸近くの戦争は陸戦隊で以てどしどしやればいゝといふ。ところが陸上の科學性の比較的低くても濟む戦争に、この科學性の高い兵隊を使ふことくらゐ非能率的なことはない。國家的に見て非常な損失である。

陸戦隊の兵隊を使ふといふことは非常な犠牲である。とにかく七年も八年も訓練したものを、さう簡単に使ふといふことは出来ない。

それから、今日のやうに科學性を非常に應用した兵隊においては、たとへ宮本武藏の精神力と技倆を持つて來ても、こちらは照準をつけて引金を引きさへすればいゝのだから、宮本武藏が今掛つて來ても敵はない。さういふ實例は幾

151



らもある。今までの精神力一點張りでいゝといふ考へ方と非常に違つた考へ方がずつと起つて來た。そのもつと程度の高いものは幾らでも海軍の中にあるわけで、その極致に行くといふ今の科學の一番精粹を貫いてゐるのである。

科學の極致が海軍では既に應用されてるといふことが言へると思ふ。國家が否應なしに、どんなにしても勝たなければならぬといふことくらゐ切實な問題はない。それには何ものも障碍はない。どんなに難しいことでも、戦争に勝つといふためには活用されるわけである。

さうなると如何に難しい科學であらうともそれを克服して、應用して行く。さうして必ず勝つといふところまで行く。精神力と一致してしまふ。陸軍でも同じであらうが、私は、海軍のことだけ言つてゐるのであるが、海軍においては科學の精粹が驅使され、應用される。したがつて、科學を驅使し得る人間といふものが、勇氣と一緒になつて初めて立派な軍人といふものが出来る。

それで昔の考へ方とは違つた軍人といふもの、それから新しい表現による勇氣といふものがあると思ふ。昔流の勇氣は、今發揮しようと思つても、あの複雑な軍艦の中では逆も發揮できない。手も足も出ない。この科學性を驅使できないのでは、勇氣があつてもなくても同じことになる。つまり今日の勇氣は、この科學性と精神力と一致させたもの、かう言へるかと思ふ。

さらに、これは宗教家の人たちから反對が出るかと思ふが、今までの高僧といふ人は、非常に長い年月かゝつて修養に修養を積んで一定の悟りまでいつた。その悟りとあまり程度の違はないやうな悟りを、年の若い人達が、それを體得してゐるといふことであるが、片つ方ではなぜそんなに年數がかゝつたか、それに對して一方は僅かの年數でどうしてそこまでいつたかといふことを考へた事がある。それは一方は精神だけでゆかうとした。一方はそれに物を加へていつた。



それからもう一つ違ひがあると思ふのは、片つ方はたゞ精神による修養といふ事だけでもつていつた。一方は大御稜威といふものと敵といふものがある。その二つが物と一緒になつてグツと精神の錬度が高まつていつたのである。八十の老僧になつて初めて悟りを得たといふ所を、訓練を僅か五年受けたものが、そこまですつた。しかも、一方は悟りだけである。こつちはそれを實行に移したといふことが言へるんぢやないか。それは大御稜威があり、敵があり、物がある。さういふ三拍手が揃つてゐる。それが老僧の用ひ得なかつた悟りに達する方法である。それだけの違ひがあるやうに、特別攻撃隊の人たちや殊勳の少年航空兵の精神を考へてゐるうちに強く感じた。

或る航空戦隊を指揮してゐた司令官から聞いたのであるが、その人が禪の高僧の所に悟りを開くために修養を受けにいつた。自分が命を捨て、戦ふ者を部下にもつてこれを指揮するといふための悟りである。ところが、その坊さん

は、極く簡単な言葉でその人に答へた。

「お前はそんなことをやる必要はない。お前は實行してゐる通りでいいのだ、それだけだ」かう言つてゐる。つまり、現實に敵といふものに向つてをり、死といふものに現實に直面してゐる。今これだけの人間を敵に向つて出發させるといふ時には、この中の何人かはすぐ死ぬのだといふことをちゃんと意識しながら、これを敵に向けて出してやる。その氣持ちを毎日味はつてゐるのだから、今更禪の必要はない。かうその坊さんは言つた。司令官もそれを聞いて、ハツと思つたさうである。これ以上禪といふものから悟りを得ることはもうないのだ。現に携はつてゐることがそこまですつてゐるのだ。少くとも近い所までいつてゐる。高僧が今更説明する餘地はない。さういふ部面があると思ふ。それは何もその人が高僧よりも偉いといふことぢや一つもない。たださういふ環境と、先に言つた三つの條件が、この人にあるからである。ほんたうに



物があり、死に直面し、敵がある。しかも、大きく大御稜威といふものが輝いてゐるので、この悟りにまで達してゐるのである。

今度の戦争を見る上に、どうしても見落されなれないと思ふことは、日本の兵器を優秀にしたといふことである。科学と精神力とが一體となつてゐるといふその科学の方面、即ち兵器、これはどうしても今度の戦争で見逃せない非常に大きな要素である。その點、兵器を使ふわれわれ用兵家である軍人、それから兵器を造るいはゆる造兵官乃至工員の人たち、この非常に緊密な協力である。この緊密な協力が出来るといふことが、日本のやうに實際うまくいつてゐる例と、さうでない例とが兩方出来て来る。造兵官の側がどうして用兵家の要求を充たさうかといふ精神、それから用兵家が造兵官に對して、自分たちが最も使ふに都合のいい兵器をどういふふうにつけて貰ふか、といふこの共同作業。その點に外國の海軍にくらべて非常な特徴がありはしないかと思ふ。しか

も、兵學校を出た用兵家の中で、機械のはうに向いてゐる頭を持つた人間には、造兵官と同じ仕事をさせる。しかも、科はやはり兵科である。用兵家そのものが造兵官になつてゐるといふことも、随分大きな特徴だらうと思ふ。

海軍の兵器を造る關係の人たちが、どれほど普通の、われわれのいふ娑婆での工業家達と違つた立場で働いたか、これは非常に大きなことだと思ふ。日本の工業力が世界で一番優れてゐるとは思つてゐない。しかし、海軍でもつて仕遂げた兵器の成果といふものは、どう見たつて外國の海軍よりはズバ抜けてゐると思ふ。これを使ふ人間が優秀であつたといふことは、戦果から見ればすぐわかることであるが、それを言つただけでは足りない。これを造つた人たちの努力、これは大變な努力で、つまり、大御稜威に靈發され、愛國心に燃えて働く場合の日本人はかういふ大きな力が出せる。工業力においても、科学においても出せるといふことを實證してゐると思ふ。



これは随分前のことで既に故人であるが、最後には軍令部次長を勤めたその人が或る時、技術家達の會議を主催してゐる時に、或る非常な珍しい兵器の提案があつた。その兵器を採用した方がいゝといふ人が三割ぐらゐる、採用すべきぢやないといふのが七割ぐらゐるあつた。それをその中將は議長として採用することに決められた。それでどうもをかしいといふので訊いて見たところが、それに對して多數の者がいゝといふものを採用するならば、それは外國と少しも違はない。外國になくて、日本にだけ強いものを持たさうとするには、多數の者がいかんといふものを採用しなければならん。かう答へてゐる。それは非常に特異な會議だと思ふ。外國にはそんな特殊な會議はありはしない。そこに日本の強さの一面が出てゐる。ほかの持たないものを持つ。特殊潜航艇はその一つである。

特殊潜航艇といふものの秘密は忠君の念に燃えて死を恐れざる精神にある。

それが一番大きな秘密で、工作上的秘密なんかは程度の低いものだと思ふ。潜れて、魚雷が積めるもので、あとは人間が死ぬ覺悟が出来てをればいゝ。その死ぬ覺悟が出来なければ、どんな優秀な兵器でも仕様がなない。日本海軍の訓練はどういふ所に特徴があつたかといへば、「訓練の場合は實戦の如く、實戦の場合には訓練の如く」といふ海軍の標語がよく代表してゐると思ふ。實際はその標語を少し越えてをつて、訓練の方が實戦以上だつた。だから、實戦になると樂である。なぜかといふと、實戦の場合は、敵といふものは一遍撃滅されるとおとはなかく出て來ない。ところが、訓練の時は假想敵であるから、幾らでも出て來る。黎明戦をやると、ちやんと現はれて來る。晝間戦の訓練をやると、ちやんと別に現はれて來る。薄暮戦には又別にある。夜戦には又夜戦で出て來る。實際にはそんなことはない。しかも、その敵の一つづつが勇敢無双な日本海軍が假想敵になつてゐるのだから、敵はない。



實際の場合には敵は一回しか出て来ない。それを訓練では朝から晩まで續けてゐる。實戦以上である。だから、訓練に携はる者は早く戦争になればいいなアと言ふ。戦争になれば敵は弱いに決まつてゐるから、撃滅すればあとは出て来ない。例へばハワイで撃滅された艦隊は永久にもうなくなつたのである。その一回の勝を占めるために何十年といふ訓練をした。さうして實戦になると訓練でやつたやうにやれ……、これでやつた。しかし、事實は普段の訓練よりも戦争のほうが能率がウンと上つてゐる。これは外國には出来なないことである。英米の海軍なんか普段どのくらゐ訓練してをつたか知らないが、實戦の場合はそうはいかのである。それは目の前に敵といふものがある。今までは弾丸が飛んで来なかつた。それが弾丸がドン／＼飛んで来る。ほんたうに死に直面してゐるのだから、ウンと能率が下る。

ところが、日本の兵隊は弾丸を受けることによつて非常に強くなる。しか

も、普段訓練には現はれて来ない大御稜威といふものが、實戦には非常に明白に現はれて来る。それで段違ひに強くなる。だから、普段の訓練よりも成績がグツといふ。訓練の場合は敵といつても日本人同士、實戦となると敵は日本よりもずつと劣つてゐるから、非常に能率が上るわけである。エンダウ沖の海戦にしる、バリ島沖の海戦にしる、或はスラバヤ沖の海戦にしる、あれほど脆く敵が參らうとは誰も思つてゐなかつた。さういふことは豫想しなかつた。豫想出来なかつた。日本人を相手にしてゐる場合は逃げないのだが、今度は逃げて了ふのだから、事は樂になる。追つかけるといふ手間はよけいになるけれど。訓練の場合の同じ日本人の假想敵では、どうしても感激しない。喜ばない。ところが、ほんたうの敵が現はれたら感激する、喜ぶ、その喜びが非常な力になる。これは恐らく外國の海軍にはないのではないかと思ふ。

しかもその敵が強ければ強いほど喜ぶ。それが逃げないでこつちに向つて来



る時は喜びの頂上である。つまり、それだけ餌物が多くなるわけだからである。外国の場合は反対である。敵が出たといふ時にはしまつたと思ふ。日本はしめたと思ふ。このしめたとしまつたの差が非常なものである。

昭和二年に美保ヶ關事件といふのがあつた。美保ヶ關で巡洋艦と驅逐艦が大衝突を起して、艦も沈んだし、大分殉職者も出た。その時私はフランスにゐて輔佐官をしてををつた。すると、フランス海軍省から代表が弔問に來た。彼は一應弔問を終つた時に、今度は自分個人の資格で申上げるといつて、「實は私は内心では羨しい海軍だと思ふ。私の方に入つた情報によると、その時聯合艦隊は眞の闇夜に燈火を全部消して、速力三十節以上で各々行動した。さういふことが出来る海軍は一體世界中にあるだらうか、私は斷然ないといふことを斷言出来る。たつた一つ日本海軍だけがさういふことが出来るのだ。その理由は、他の國では政治が干與する。訓練のことでも若しそんなことをしたら、政

治家たちが何といつて非難するかわからない。それを日本では海軍が必要だといふ場合には、ほかの政治家はそれに口を出さないで、海軍に思ふ通りの訓練をさせておく。さういふ國はほかにない。さういふ猛訓練を思ふがまゝにやれるといふことが既に大したことだと思ふ。われ／＼は日本海軍の實力といふものを知らない。しかし、さういふ訓練をやれるといふその一事で、日本海軍がどのくらゐ眞面目な、さうして眞の底力をもつた海軍だらうかといふことを想像せざるを得ない。われ／＼としては實に羨ましい限りである」さういふ挨拶をして歸つた。なかなか物のわかる男だと感じたが、彼の言つた通りだつた。さて、話は變るが海軍で言ふ娑婆といふ言葉を不思議がる人があるが。少しも不自然ぢやない。われ／＼の社會といふものは、幽明境を異にした向う側にある。結局初めから死んでゐるわけである。その戦死した後の社會に初めからゐるといふことである。だから普通の民間人のゐる所は娑婆といふことにな



る。それが起りだらうと思ふ。初めから戦死してかゝつてゐるのである。

それで、或る一つの手柄を掴まへて、それを大きく扱ふといふことは海軍では非常に嫌ふ。さういふことは、その人だけがさうぢやないのだといふ思想である。全艦隊、大きくいへば全海軍がその通りだから、その一々を掴まへてそれを大きく扱ふといふことは公正でない、かういふ意味であらう。とにかく非常に嫌ひである。だから今、日本海軍で戦争してゐるのは、山本長官の名しかない。戦死者は別であるが、そのほか一名の名前も出ない。生きてゐる人では艦隊の最高指揮官一人である。それはそんなものを出すのがいやなのである。誰がかういふ手柄を立てたといふことは言ひたくない。さうではなく、全海軍の力が集まつてこれだけの戦果を擧げてゐるのであつて、その一人々々の力でも何でもなし。しかし、山本長官は代表者だから出す。かういふ思想である。これは不思議に思はれるかも知れないが、我が海軍では功名争ひ、先陣争ひ、

さういふことはないのである。

功名を競ふといふ精神は、その底に利己心がある。先陣争ひもさうである。その利己心を利用して早いところをやつつけるといふ方法は昔からやつてゐるわけであるが、これを若し海軍でやつたら大事になる。共同作戦が全然出来なくなる。何時何分にお前の部隊はかうやれといふ命令が来たら、その通りにやらなければならぬ。それより先に何もやつてはいけない。つまり、オペラのやうに全員が決められた時間に決められた臺詞を言ひ、決められた動作をしなければならぬ。結局、海戦といふものは大きなオペラである。イタリー語では現に作戦のことをオペラといつてゐる。しかし、このオペラたるや餘り耳に快き音ばかりぢやない。轟々たる砲聲を轟かすオペラである。その時間をちよつと間違へたらオペラにならない。ぶつ壊しである。そこで、先陣争ひ、功名争ひは出来ない。これが訓練の一つの目標である。その代り決められたことを



やる點になると命がけである。若しそれをやめれば非常に樂になることがあるかも知れない。その通りやればどんな危険が待ち受けてゐるかも知れない。しかし、命令通り飽くまでやらなければいけない。随つて命がけである。そこに命を超越した命令實行、任務遂行といふことが起つて来る。

私は戦争の初めに、ハワイ海戦、マレー沖海戦で少年飛行兵が非常に勇敢に働いたといふことを度々話したことがあるが、それは何故かといふと、兵學校を出た者はこれは選びに選ばれたもので、完全な精神教育を受けた人間だから、その偉さについては言ふことがない。だから、言はないだけの話である。ところが少年飛行兵は國民學校で教育を受けて、いきなり海軍に入つて来た。それは兵學校の生徒を選ぶやうなそれほど峻厳な選び方ではない。さうしてごく短時間の訓練で航空兵として戦つてゐるわけである。さういふ兵學校の如くひどい選拔を受けたものでも何でもない者がどれだけの働きをしたか、そこに

非常に特徴があると思つた。そこで特に少年飛行兵を一例として擧げたわけであるが、その一例を言ふと、教育の一年目には喜んでお國のために命を捧げるといふ氣になる。更に一年半たつて教育の度が進むと、敵を斃すまで死んぢやならんといふ氣になる。さういふ積極性のある信念、それが今度のマレー沖海戦、ハワイ海戦で非常な力を出した。あすこに突込んでゆく時の彼等の氣持ちは、敵がゐる間は死んぢやならん、その氣持ちである。

それで、これを聞いた教育家たちが少年飛行兵を教育してゐる土浦に殺到した。どうしてさういふことが出来るのだといふ質問をした時に、まだ若い人であるが、その教官が答へて、「與へられた任務を、完全に遂行する、といふことを教育してゐるのだ」と答へた。所が、師範學校の校長さん方には、それだけではわからない。「さういふことは我々だつて教育してをります。我々の修身にだつてあります。しかし、なか／＼さうはゆきません。何かもう少し奥があ



るんぢやありませんか。」かういふ質問をする。そこで教官は、「我々は、知識の切實きせつをしてゐるんぢやない。魂と命をかけてやつてゐる。そこが少し違ふかも知れない。」かう答へてをる。魂と命をかけて任務を完全くわんぜんに遂行すいこうしろといふことを教へてゐる。これはいはゆる今までの教育の態度とちよつと違つた態度である。教育は知識ちしきを與へるだけではない。その人間の魂と命を投出してやつてゐる。そこにさういふ短時間のうちにあゝいふ立派りつぱな人間じんげんを育て上げたわけである。さういふ少年飛行兵を育て上げた人たちはみな兵學校出身の人であるから、その兵學校へいがくかうを出た何々中尉はこんなにも勇敢だつたと言ふやうなことは云ふ必要がない。

ハワイ空襲の時に、或る少年飛行兵の一人が三番機で行つた。一番機、二番機はちやんと魚雷ぎょらいを發射して上つてしまふ。それで自分が命ぜられた通り射たうとした。ところが、十七メートルの横風よこかぜが吹いてゐるので流された。つま

り、射點しゃてんを外れた。そこで彼はもう一遍狙つたが、又しくじつた。それからもう一度廻つた。その間一分間に何萬發なんまんぱつの彈丸が飛んで来る。その間を二回やり直して、三回目これならば中るといふ所で魚雷を射つて歸つて來た。これは普段彼が教へられた通りなのである。若しも射點しゃてんを外してしくじつたらやり直せ、何遍でもやり直せ、さうしてこれなら中るといふ點にいつたら初めて射て。然し、これは彈丸たまごの來ない所で教へられてゐることである。それを何萬といふ彈丸がドン／＼飛んで來て、飛行機が火を吹いて落ちてゆくその中で、教へられた通りやつた。さうしてちやんと中てゝゐる。

大體あゝいふ際に、若し少し外れたと思つても、落としてしまつてよしんば中らなかつたにしても、誰も番をしてゐる人もありやしない。敵の艦かみから見てをつて、何番小隊の何番機なんばんきは本當の射點でない所で魚雷を射つたといふ報告なにか來やしない。然し、完全に自分に與へられた任務にんむを遂行すいこうする。それには、



しくじれば三遍でも四遍でもやり直す。中らないとわかつてゐて射つといふやうな事は夢にも出来ない。而も、その間彼の命は、死の危険にさらされてゐる。その危険を冒さなければやり直すことは出来ないのである。そこまで教育が徹底してゐる。普段の訓練において實戦の場合は訓練通りやれといふのは、そこに意味がある。

これは、最近の日本精神である。まだ精神としては新しい。そうして果してそれが利口かどうかは、外國海軍の戦術の上からみたら議論の餘地があるかも知れぬ。しかしこれがあるが故に我が海軍は強いのだ。

### 戦捷に導く日本女性の偉大性

世の中に母がないと戦争はないことになる。これは人口がだん／＼減るからだ。

しかしそんなことはあり得ないから戦争は絶えない。戦争があるところ良き母があれば戦争は勝つ。この理由は良き母のもとに良き軍入が出来るからだ。この度の戦争以來わが海軍の勇しい戦死をなさつた方々の後にはいつも良き母がをられた。

世にも尊きものは良き母である、軍神のお母さま方は境遇も違ひ、生活も違ひ、格式も違ふ。



しかし共通してゐるものが一つある、己れを空しうすること、愚痴をいはない、取越し苦勞をしない、心の奥に非常な強さを持ちながら、優しい怒らない母、叱らない母、心の美しい母、お化粧料や時間には無關係に、心を磨く美しさがあつた。しかも誇らない、極めて謙虚なへりくだつた氣持をもつて、自分の力で軍神が出来たといふふうには考へてゐられないのである。

この反面米英の母を見ると、ここでは結婚した婦人は自家の系圖や兩親のことは考へず自分の樂な生活だけを考へる。アメリカでは海軍の訓練が三ヶ月以上になる場合はわざ／＼一隻の船を仕立て、艦隊乗組員の奥さんに乗せ、艦隊について行動する。これは三ヶ月以上夫がゐないと離婚を認める法律があるからである。日本では思ひも及ばないことだが、その場合子供はなげつ放しにする。日本の母が子供のために何もかも犠牲にするのと雲泥もたゞならぬものがある。

このことはやがてこの度のやうな大戦争になると、はつきりとその差を現しにくる。

例へばアメリカ潜水艦、これは恐らく日本へのゲリラ戦を命ぜられてくるものと信ずるが、實際は日本に爆雷があれば攻撃して來ない。さういふものはつきり無い、危くないところだけを狙つてくる、赤十字の病院船、空になつた輸送船、さういふのを狙ふ。

それに對して日本の勇士を思ひたい、「海軍精神」のところでも述べたが、ハワイの特別攻撃隊が勇敢なそして悲壯な襲撃を決行してゐると同じとき、ヒツカム飛行場を襲つた戦闘機部隊の中隊長に某大尉がゐた。大尉はそこで非常に沈着に敵機をやつつけ、豫定の行動が済んで自分の戦闘機隊を眞珠灣のオアフ島片隅まで引連れて歸つた。

そこには約束通りにその飛行機隊を味方航空母艦まで誘導する機がまつてゐ



る、その誘導機にその戦闘機の一隊を渡す、そして自分は兩翼を振つて單獨行動をとると合圖した。燃料タンクに敵弾を受けて燃料が洩れ、このまゝではとても航空母艦まで歸れないと隊長は考へた。そこで元へ戻れるとして別のホイラー飛行場へ行き敵機を片端からやつつけ、いよいよ最後の一弾がなくなつたと思ふと彼は上空高くもう一度舞ひ上り、そこから真直ぐ九十度の急降下をして敵格納庫にぶつつけて自爆した。

その隊長機が元へ引返すのを見てゐた直屬の二機の飛行機も、おめ／＼と航空母艦に歸れるものかと考へた、そして隊長機が見えなくなると同時に——見える中は叱られる——二機も引返し隊長機は何處に行つたか分らぬから、とに角敵を捜した、二機は傷も何もなかつたが隊長と同じやうに最後の弾を打ち盡し、遂に敵弾にやられるや同様に高く舞ひ上り直角に急降下して敵の格納庫に二機ともに打つかつていつた、この大尉の人格と部下の氣持、思つても胸が迫

るものがある。

私の云はんとするのは、この次のことである。

この大尉は一人息子であつた。

故郷には父はなく唯一人お母さんだけがあつた。大尉は非常に身長の高い綺麗な、ものを必要以外言はない立派な軍人であつた。そして戦闘機乗りは三十歳位までは結婚しては上達が止るといふので、童貞としてハワイの上空に散つたのである。

残された唯一人の母は、しかしまことに健氣に、

「お國のために捧げるためにあすこまで大きくしたのです」

といはれた。

御心中はどれ程かと思はれるが、さすがに日本の母である。すべてをこの子供の中に注ぎ盡して、その子供が最後に 天皇陛下に生命を捧げて亡く



なつてくれたといふことを涙も見せず感謝されたといふ。

また、この話も繰り返すことになるが、マレー沖の海戦でわが少年航空兵の勇士が一分間に六萬發といふ敵弾の中へ突込んでいつた、そのとき彼は

「照準望遠鏡を命ぜられた通り睨んでゐた、そして敵の甲板にゐる青い眼玉が見えてくると、村の鎮守にお詣りしてくれる母の姿を見た」

と述懐してゐる、女性といへば母しか知らないこの少年航空兵がその母の姿を照準鏡の中に眺めながら弾の中へ突込んで行く……かういふふうには戦ひながらも母の姿を見るといふ、それほど大きな母の力といふものが戦ひをするものの頭にあるのである。

またある数人乗つてゐる飛行機が敵弾を受け、敵地に入る前に不時着となつた、乗員も非常な傷を負つた、その中の一下士官は息を引取る前に、

「歸つたら、僕の母に詫びてくれ、大した手柄も立てないで死んでしまふ、ど

うぞ許して下さい、自分の子供は必ず飛行家にするやうお母さんに頼んでくれ」といつた。

あとで司令官がその母を訪ねた、ある四軒長屋の中の一つに、その母は住んでゐた、畳がなく、あんべらが敷いてあり天井がない。さういふ家で暫らく司令官にお待ちを願ひ、着物を着更へて出て来た、それが一番いゝ着物に相違ないのだが膝のところは一ぱいに継ぎのある洗つたばかりの着物であつた。その父は病氣で寝たまゝで動けない、その母だけが一家を背負つてゐる、自分の息子を失つてこれからさきどうなるかといふ境遇なのである。この親達は粟と芋だけを喰べてをり、お米は喰べてはゐない。

しかもその母は子供が死ぬ時に母に對し大した手柄も立てぬのを詫びてくれ、といふその偉い母であつたのだ。

またある戦死した水兵の家は田舎のあばら家であつた、そのあばら家で母は



自分の子供がお國のために、天皇陛下萬歳を叫んで亡くなつたと聞き、何よりも嬉しうございませと毅然としてゐた。訪ねた司令官もどうしてこの片田舎のあばら家にさういふ健氣な精神が生れて來るかと言はされた。

けれども偉い母といふものは決して富んでゐるから、貧乏だからといふことではない、たゞ自分を捨てる、犠牲にするといふ心から出てくると思はれる。

有名な話は、九軍神の一人の士官が、最後の別れに故郷に歸つてお母さんにたつた一つ聽いてゐることは、「私が亡くなつたらお母さまは泣きはしないだらうか」といふことであつた。

また真珠灣攻撃に出て行くときお辨當にナイダーやチヨコレートを持つた勇士は子供の時の楽しい遠足を思ひ出したことであらう、そしてその辨當がもしも母のつくつてくれた辨當であつたら……と考へたのではなからうか。また一人は積木細工の玩具を持つて行つた、いくつになつても子供の氣持を失はない

らしく勇士達は自分が幼かりし頃の母の姿を描いてをつたらうといつも私は想像する。

この間、兄弟二人、海軍の飛行將校に出したお母さんから手紙が來た。それは不思議に二人とも練習で殉職されたので手紙の一節に

「……まして千載一遇の時に盡忠報國の誠をなし得ず、空しく散りしこと誠に申譯なく、本人の意思と共にこの母が深く……お詫び申上候……二人共に武運拙く何をもつてお詫びに代へんと思ふこの母の胸ははり裂け潰るゝの思ひに御座候……」

とあつた。

二人しかない息子を二人とも海軍の飛行將校に仕上げた母の氣持、何とも申しやうもないのである。

しかも申譯がない、何とお詫びしてよいかわからない……かういはれるその



氣持を考へると、日本の母といふものは實に強い母だと、つくづく感ずるのである。

私は「母がなければ戦争はない」と云つた。

しかし戦争はなくならない、ある限りは勝たなければならない、勝つためには軍人が強くなければならぬ。國民全體が強くなつてはならない。その國民を強くするのは母である。どんなに戦争が續かうとも世のお母さま方が自分の家庭を守り次から次へと強い勇士を育て下されば安心である。

あの軍神のお母さま方の中におしやべりはない、黙々として實行、取り越し苦勞をしない、かういふ特質、これを私は日本のお母さま方に、またこれからお母さまになれる方々にもつていたゞきたいと思ふのである。

### 海戦別敵艦撃沈戦果

帝國海軍が擧げた綜合戦果のうち主なる敵艦艇撃沈破の状況を海戦別に列記すれば次の如くである。(括弧内はトン數)

#### ハワイ海戦【十二月八日】

- ◇撃沈 戦艦 米カリフォルニア型(三二、三〇〇)、米メリーランド型(三一、八〇〇)、米アリゾナ型(三二、六〇〇)、米オクラホマ型(二九、〇〇〇)、米ユタ(二九、八〇〇) 巡洋艦 米甲巡又は乙巡二隻、米給油船一隻
- ◇撃破 戦艦 米メリーランド型(三一、五〇〇)、米ネバタ型(二九、〇〇〇)、米ペンシルバニア型(三三、一〇〇) 巡洋艦 米輕巡二隻、米乙巡四隻 驅逐艦 米驅逐艦二隻



◇撃 沈 マレー沖海戦【十二月十日】  
戦艦 英プリンス・オブ・ウェールズ(三五、〇〇〇) 高速戦艦 英レバ  
ルス(三三、〇〇〇)

◇撃 沈 ジョンストン西方【二月八日】  
水上機母艦 米ラングレー(一一、〇五〇)

◇撃 沈 ハワイ西方【二月十二日】  
航空母艦 米レキシントン(三三、〇〇〇)

◇撃 沈 タラカン沖【二月十二日】  
敷設艦 蘭プリンス・ファン・オラニエ(二、二九二)

◇撃 沈 シンガポール沖【二月十日—十四日】  
巡洋艦一隻、英特設巡洋艦一隻、潜水艦一隻、砲艦一隻、敷設艦一隻、特  
務艦一隻、其他

◇撃 破 蘭巡洋艦一隻、驅逐艦一隻、其他

◇撃 沈 エンタウ沖海戦【二月廿七日】  
驅逐艦 英サネット(九〇五)

◇撃 沈 ジャバ沖海戦【二月四日】

◇撃 沈 巡洋艦 蘭乙巡ジャバ型(六、六七〇)、蘭乙巡トロンブ型(三、三五〇)

◇撃 破 米甲巡オーガスタ(九、〇五〇)、蘭乙巡トロンブ型(三、三五〇)

◇撃 沈 バリ島沖海戦【二月廿日】

◇撃 沈 驅逐艦 米驅逐艦二隻、蘭驅逐艦二隻

◇撃 破 巡洋艦二隻、驅逐艦一隻

◇撃 沈 ニューギニヤ北東【二月廿一日】

◇撃 沈 航空母艦 米中壱新式空母

◇撃 沈 チモール島附近【二月廿二日】



◇撃 沈 敷設艦 蘭ヤン・ファン・ワラーケル(七四〇)

大島島(ウエーキ)附近 【二月廿四日】

◇撃 破 米巡洋艦二隻、米驅逐艦一隻

バリ島附近 【二月廿七日】

◇撃 沈 特設航空母艦

スラバヤ沖、バタビヤ沖海戦 【二月廿七日—三月一日】

◇撃 沈 巡洋艦 米甲巡ヒューストン(九、〇五〇)、英甲巡エクゼター(八、三九〇)、濠乙巡バース(六、九八〇)、濠乙巡ホバート(六、九八〇)、蘭乙巡デ・ロイテル(六、四五〇)、蘭乙巡ジャバ(六、六七〇)  
驅逐艦 米、英、濠、蘭八隻(米英兩海軍省共同發表によれば撃沈驅逐艦名は左の通りである)  
米ボーブ(一、一九〇)、英ジュビター(一、六九〇)、英エレクトラ(一、三七五)、

英エンカウンター(一、三七五)、蘭コルテネール(一、三一〇)、蘭エヴェルトセン(一、三一〇)、蘭ウイッテ・デ・ウイット(一、三二六)、濠ヤーラー(一、〇六〇)(内二隻擱坐)  
潜水艦 七隻 砲 艦 一隻 掃海艇 一隻

ジャバ島南方チラチャツプ沖

◇撃 沈 驅逐艦 英ストロングホルド(九〇五) 【三月二日】 砲 艦 米アセヴル(一、二七〇) 【三月三日】

濠洲西方 【三月二日】

◇撃 沈 巡洋艦 米マープルヘッド(七、〇五〇)

ロンボク水道 【三月九日】

◇撃 沈 掃海艇 蘭ヤン・ファン・アムステル(五二五)

コロンボ方面 【四月五日】